

福岡日雇支配・大坂通日雇萬屋喜平次について

藤 村 潤 一 郎

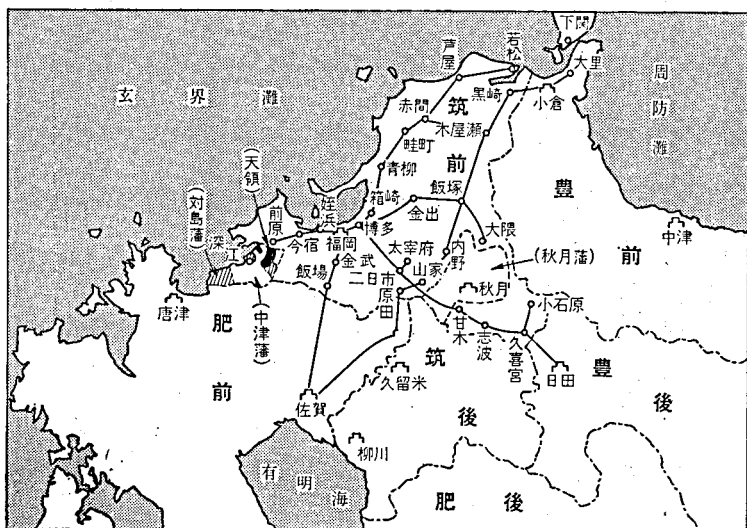
九州大学九州文化史研究所蔵「福岡市森田家旧蔵文書」は、天保九年三月—嘉永六年十一月「御用日記一」一冊と百余通の書付から成立っている。森田家は万屋と称して福岡の日雇支配を勤め、また大坂川西組通日雇でもあった。この文書については既に近藤典二「福岡の日雇人足請負人」福岡地方史談話会会報一〇号があり、本稿はその教示を受けた事を銘記しておく。

一 福岡藩の宿駅

筑前国は享保五年以降その大部分は五二万三二〇〇石の福岡藩と、その支封五万石秋月藩の領地で両者は纏っている。その他には国の西北部に若干の中津藩、対馬藩、天領がある。地域については第一図をみられたい。

福岡藩の交通については長崎道（冷水道）の領内分として筑前六宿^{むじゅく}がある。黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家、原田がそれである。黒崎から豊前国の小倉、大里に、原田から肥前国長崎に至る。又途中の山家から筑後国松崎、府中を経て肥後国に連絡している。

つぎに国内の交通として二十一宿がある。これは「福岡、博多、箱崎、青柳、畝町、赤間、芦屋、若松」が東に向



第1図 筑前国関係地名図

って黒崎に連なり、途中の博多から「二日市、宰府（原田）」を経て筑後、肥前に、更に二日市から「甘木、志波、久喜宮」と秋月、日田に向う。又箱崎から「篠栗」、飯塚を経て「大隈、小石原」から秋月、日田に至る。福岡から「姪浜、今宿、前原」を通って肥前の唐津に、途中の姪浜から「金武、飯塚」を経て肥前の佐賀に至る。篠栗の代りに金出とある場合もある。⁽¹⁾

この交通路を支えるものとして夫役が課せられている。

即ち「福岡藩郡役所記録」⁽²⁾によると、寛保三年六月二〇日に

一御国中宿々諸通之節、人馬差出方之儀に付御達之事

○若松 黒崎 木屋瀬 飯塚 内野 山家 原田 前

原 箱崎 青柳 赤間 二日市 甘木 篠栗 宰府

小石原 姪浜

右之宿々人柄共御代官支配御通方引請可相勤候、宿

人馬を以相仕廻可申候、不足分大庄屋へ申付、郡人

馬寄召仕、追て入切払帳、郡奉行え可差出候

一郡役宿役之勤方、只今迄之通に可仕事

一郡代中御通之節、罷出に不及候事

一御通之節、人馬遣方之儀は、元文二巳年相触置候通之事

一長崎奉行阿蘭陀通之節、長崎に御掛合有之筈に候間、追て可相触候事

とあり、宿駅の人馬役所の人馬と、郡の大庄屋の人馬仕組加役所による人馬が使用される。郡役としての人馬は明和七年「御國中郡夫村夫取分定書」⁽³⁾の四三カ条の内で

郡夫可相立定

一、御参勤御上下継人馬之事

一、長崎御往来継人馬之事

一、御遊獵ニ付御滯座御日帰ともニ継人馬御休所御獵橋仕調、御舖菰仕調夫、其外品々御用夫之事

一、右御往来之節、品々郡寄物持送夫、其外、内夫、御休所仕調掃除夫之事

一、御大名方江戸御上下、阿蘭陀、長崎御奉行御上下、御茶屋、町茶屋手入掃除夫、御茶屋入用之夫、宿内掃除、御先弘川越夫、継人馬之事（但書略）

一、（略）

（中略）

一、相定候宿駅、其村面役ニ而年中間通勤切不申分、郡々加勢人馬之事（但書略）

（以下略）

とある。即ち福岡藩の参勤交替、出獵、巡視以外に、長崎道を通過する長崎奉行、日田郡代、御領代官、巡見使、上使、測量方等の幕府役人、及びオランダ商館長参府紀行、他に九州諸藩の参勤交替である。⁽⁴⁾

つぎに宿場には雲助がいる。彼等は通日雇に似た性格を持っているが、木下讃太郎によると筑前六宿の内で山家に

昭和九年頃には間屋場の後に雲助部屋跡があり、

諸国諸大名が封地の国名で、其氏名の代りに呼び合っているのに倣って、賭博と酒で終生を暮す雲助も、薩摩から流れ込んだ雲助を「薩州」と呼び、加賀から流れ込んだのを「加州」と呼んで、何れも大名気取をなして居るから豪気なものだ。仏さんの位階ではないが、上品の雲助は長持を担ぎ、中品の雲助は駕籠を昇ぎ、下品の者はタダの荷物を運ぶが、若し夫れ上品上生の雲助に至っては、雲助部屋から一步も出でず、多くの雲助を顎の先でこき使う。夫れに雲助は荷造りが上手の上に、長持唄が巧妙でなくては其の資格がないのだから（下略）⁽⁶⁾とある。これは東海道の雲助と似ているが、彼等が長持、駕籠、荷物を運ぶ事が注目される。ただ木下讀太郎が何者かは知らないで、実際に山家での事か、それとも単に昭和初期の研究を反映しているかは今後にまちたい。

つぎに具体的な姿を「鞍手郡誌」⁽⁶⁾に記載されている文化五年辰四月「木屋瀬宿間通人馬賃建前」により考えたい。これは木屋瀬宿間屋、同庄屋から遠賀鞍手御免方御役所に宛てた木屋瀬宿間通人馬継方を御建前で請ける請書であるが、文化五年辰四月、同十年酉五月、同十一年戌十二月、天保十年亥三月と請書が書継がれている。原文書をみていないから断定は出来ないが、恐らく文化十一年・天保十年の内容と解釈したい。

木屋瀬宿は筑前六宿では、登りは黒崎に、下りは飯塚に連らなり、二十一宿の赤間にも連らなっている。

内容は第一・二表の通りであるが、第一表ではAは幕府関係分であり、Bは鹿児島藩関係、Cは恐らく九州諸藩関係、Dは主として福岡藩関係であるが、正確には「福岡御役人様御飛脚御上下宿々御代官様若松御船方御用御下り御銀御献上御荷物御登り其外他国寺社御証拠付の分共」とあるから、他国の寺社関係が含まれている。Eは福岡藩の御状箱持夫、御用物送り夫、諸飛脚と、御茶屋の諸維持費及びA・Dの諸通行に際しての延引による手当人足の特費である。以上は旧来からの項目であるがF・Gは以前は商人であるから賃銭雇による通行であったが、近來御絵府使用

項	目	人足	馬	足銭・増賃銭	御定賃銭
A	京大阪江戸長崎御役人御絵府御 通路御上下分御建前	1055	459	122,652	142,251
B	薩州御家中御通路御上下分送人 馬御建前	1184	428	133,405	119,149
C	諸国御家中御通路御上下分送人 馬御建前	2810	632	247,522	288,496
D	御国御家中御証拠付分御上下分 送人馬建前	671	512	183,106	16,168
E	御茶屋・御状箱・諸飛脚・他御 建前	3717	0	365,770	0
A～E 小計		9437	2038	1052,455	566,082
F	京大阪江戸堺長崎糸荷物下請商 人より才判添荷物御絵府持参分	334	208	37,426	61,934
G	京大阪呉服屋通路御絵府持参分	182	263	35,554	58,298
F～G 小計		416	571	72,980	120,232
総計		9853	2609	1125,435	686,314

第1表 文化・天保期木屋瀬宿間通人馬賃建前表 (I)

になり御定賃銭による通行となったもので、Fは京など糸割符関係、Gは京大阪の呉服屋である。なお数字は若干合計と異なるものもあるが表記の儘にしてある。

結局人足九八五三人、馬二六〇九疋、賃銭一二二五貫四三五文、御定賃銭六八六貫三四文になる。賃銭は足銭三四一貫一三文、増賃銭七八四貫〇二三文に分かれる。後者は増夫無賃銭のため御定賃銭は附かない。御定賃銭は先方から請取るから御役所とは無関係である。

ず、一文銭貨の六〇枚を一匁とすることによって、

貨幣の価値尺度の機能は、実質的に果たしているが、それ

さて福岡藩には六拾文銭、六銭と表現されている匁銭がある。これは藤本隆士「近世西南地域における銀銭勘定」によると、「銭の流通が秤量貨幣としての銀と同様に行なわれているのである」、六銭は「決して銭鑄貨としては存在せず、一文銭が単に六〇枚を一匁めに「一束と考えられた計算上の単位」であり「六十文銭一匁という定価貨幣は存在せ

H	御役人様泊入用夜具借立損料建前	六錢 匁 150.00
I	御代官様御役所定小使昼夜請切泊 360 人	864.00
J	御茶屋定仕番給錢	220.00
K	宿用当次式人給錢	800.00
L	問屋定詰御老人給錢	400.00
M	問屋抱人高小指給錢	363.00
N	問屋給錢十二月渡	700.00
O	人馬給錢	1,000.00
P	右同断（文化10酉年増遣）	1,500.00
Q	福岡御家中様御交代送り夫	1,000.00
R	間通臨時通分賃錢被仰付分	4,486.30
S	年中入用・御通方餘相出来の節他領宿迄断賄代・其外雜用共	783.00
H～S 小 計		12,266.30
T	臨時御通路間通現人足 1100 人賃錢御建前増分	2,933.33
U	間通建前増・御国若殿様御用に付家中江戸御上下御建前増現夫750人	2,000.00
総 計		17,199.63

第2表 文化・天保期木屋瀬宿間通人馬賃建前表（Ⅱ）

が表示され仕切られても、支払手段は、必しも錢貨ではないことから計算貨幣と捉えてよいと考える」とされている。

さて前記賃錢は六錢一八貫七五七匁二分とある。次に第二表は六錢が単位で、大略通常維持経費と臨時増分と考えられる。後者では人足一八五〇人となっている。合計は六錢一七貫一九九匁六分三厘であり、前記賃錢との集計を六錢三五貫九五九匁五分四厘としており計算より二匁六分六厘多い。

この金額の内でI～Nを正、七、十二月に、OPを七、十二月に問屋に渡される。この六錢五貫八四七匁を除いた残額六錢三〇貫一二匁五分四厘は一二カ月に分割して一カ月六錢二貫五〇九匁三分七厘が渡されている。

しかし戊午（文化十一年）から辰年迄七カ年御救渡分としてこの外に問屋人馬賃錢建前増六錢三貫六〇〇目、問屋給米十俵代六錢五〇〇目、諸給米諸雜用現不足分六錢二貫一九七匁、合計六錢六貫二九七匁が渡さ

れた。

この九州諸藩等の詳細について文化五年四月「木屋瀬本通人馬賃錢建前帳⁽⁸⁾」により考える。これは木屋瀬宿問屋、同庄屋、直方町大庄屋から永田清十郎様御役所に宛てた木屋瀬宿本通人馬継方をこの御建前で請けた請書である。内容は第三・四表の通りであり、先ず九州諸大名は秋月藩など筑前、筑後、肥前、肥後、薩摩の一五藩である。

藩	石高	国	藩主	御登達	御下向達
				六錢 匁	六錢 匁
秋月	万石	筑前	黒田	1,800	1,800
小城	5.0	肥前	鍋島	250	450
小吉	7.325余	肥後	相良	450	810
唐津	2.51余	肥前	水野	220	290
蓮池	6.0	肥前	鍋島	140	240
島原	5.26余	肥前	松平	520	920
大村	7.0	肥前	大村	510	820
鹿島	2.797余	肥前	鍋島	210	360
宇土	2.0	肥後	細川	190	330
柳川	3.0	筑後	立花	730	1,120
久留米	11.96	筑後	有馬	820	1,380
熊本	21.0	肥後	細川	1,800	2,740
佐賀	54.0	肥前	鍋島	1,220	2,060
鹿兒島	35.7	薩摩	島津	1,970	3,320
平戸	77.08	肥前	松浦	450	700
	6.17				

第3表 文化5年木屋瀬本通人馬賃錢建前表(1)

項	日	御登達	御下向達	他
		六錢 匁	六錢 匁	六錢 匁
長崎奉行		2,380	3,240	
阿闍陀人		2,150	1,175	
長崎御勘定方御普請方		140	150	
同上		140	150	
唐津銀送				490
長崎御下向目付			800	
紙・墨蠟燭油代其外雑用				1,500
人馬両役所小仕并村々小仕給錢共				2,500

第4表 文化5年木屋瀬本通人馬賃錢建前表(2)

合計を六錢二七貫八八〇目として、兩年に割って一カ年分を六錢一三貫九四〇目とし、これが九州諸大名分である。

つぎに長崎奉行、阿蘭陀人、長崎御勘定方御普請方（これは二度往来）、長崎御下向目付、及び唐津銀送と經常費があり小計は六錢一五貫四九五匁である。前記大名分と合計して六錢二九貫四三五匁が一カ年御建前分であるが、これと第一・二表との関係は明らかでない。ここでは単に福岡藩の宿駅制度、夫役の概略を示したに留める。

二 日雇頭、日雇支配

万屋森田氏は福岡の日雇支配であるから、これに関係した日雇頭、日雇支配についてみる。この点についても前記近藤典二「福岡の日雇人足請負人」から教示をうけた。

原田安信撰「博多津要録」によると、寛文一二年子九月に「町々より人足出シ申事」⁽⁹⁾として

一町々々出申人足之儀、先年より申触候通り、其町々出人足高ニ応シ三度ニ出シ切申様ニ仕候得と触状廻申、并会所ニ而人馬御取扱成候御侍衆中ニ而、津中々出申人足ともニ、少も寄端仕間敷触状廻申候事

とある。会所とは恐らく人馬次所ではないだろうか。福岡は二十一宿の一つであるから宿駅としての一種の歩役が課せられていたと推測される。

貞享五年辰四月には「人足受方へ被仰付候事」⁽¹⁰⁾として、津中人足受方に帯屋与三左衛門、残屋七右衛門、小田徳左衛門が御仰けられた。宝永三年戌九月二一日付高木又五郎他宛阿部久兵衛・平戸屋「人足錢取立支配者取立置候札銀焼付ニ付并申受合一卷之事」⁽¹¹⁾によると、宝永元年申七月に阿部長兵衛が津中人足銀取立支配に仰付けられたが、取立てた銀札焼失により同三年に平戸屋弥兵衛も指加えられている。前記の人足受方との関係は明らかでない。

正徳五年未三月二七日付「嶋井善兵衛津中人足請方之事」⁽¹²⁾として同未年四月朔日から戌（享保三）年四月二九日迄

三年切に人足受方を嶋井善兵衛が受合ひ、損失等の場合には家屋敷家財を召上げられ曲事に仰付けられても理りがましい事は申上げない。津中人足請方は入札の上で人足一人に八分九厘であるが、御役所定詰夫を減ずるので、人足一人八分五厘で請合ひ町々の夫高で毎月取立てるが、切符人足、加勢人足は町々からは受取らない。また御橋御普請、石垣土手普請は受方以外の事であり、それ以外の御用人足は御役人の指図次第人足を出す。夜間の時付の御状がきた場合には人足二人で送り届ける。従って宿駅関係以外の人足も含めての請負である。

なお嶋井善兵衛は、明和二乙酉歳春三月凡例、淡路散人津田元願校定、男元貫編録「石城志」⁽¹³⁾卷之十一人事門下には、年行司として元禄に

嶋井善兵衛（宗室五代の孫剃髪して貞室と号す、浜口町ニ住ス、家母登志屋と云

とあり、さらに当時御扶持人の項には「三人扶持 嶋井善兵衛」とある。彼は初期博多商人島井宗室の子孫である。⁽¹⁴⁾再び「博多津要録」によると、享保元年申九月付「津中人足受方理り申ニ付賃錢増之事」⁽¹⁵⁾では、嶋井善兵衛は損失を理由に享保元年九月から前記請負期間中を人足一人に九分九厘宛で請負い、且従来 conditions の他に福岡藩支封直方藩主黒田長清の御当地往来、長崎御免駕に御用人足を出す事を命ぜられた。

ついで同四年亥一〇月「津中人足賃錢金銀割増ニ付賃錢増シ之事」⁽¹⁶⁾では、同月から金銀割増を理由に人足一人につき一匁四分五厘宛になった。

「福岡藩町役所記録」⁽¹⁷⁾では享保二〇年正月二六日付で、両市中日用取の人数を現在以上増加を認めず、賃銀は町家も準用で、家上ふき日用一匁二分、普請方一匁、一日雇平日用八分と定めている。

ついで「福岡藩浦役所記録」⁽¹⁸⁾によると享保二〇年一二月二四日に御城下、町、郡、浦分に居る日用取の賃銀が来る

正月一六日付で定められ、方角切に日用支配人が申付けられた。日用を雇う場合には支配人に申告して下ヶ札持参の者を雇う。若し直接相対の場合には日用が支配人に申告して札を受取る。相対無札の場合は日用は銀五分、雇主は銀一兩の科料である。

日用賃銀は第五表の通りであり、支配料は日用取から指出す。あんたかき、供使の賃銀は一日雇で福岡、博多から二里以上の場合を示した。他国又は二日に及ぶ遠方の場合には時価の米直段等を考慮して定める。

賃	銀	支配料
家上葺・井土掘日用	1.50	文3
普請方日用	1.00	2
平日用（日雇切）	80	1
平日用（半日雇）	60	1
あんたかき・供使	1.50	

第5表 享保21年1月16日付日用賃銀表

この賃銀は並々の日用取の場合であり、強弱、老若により支配人が考慮して定めて札を渡す。

さて日用支配人は福岡は町の受持が定められ唐人町甚七、湊町次郎兵衛、呉服町喜右衛門、鍛冶町正七、薬院町忠蔵の五名、博多は浜口町嶋井久右衛門、辻堂町善七、中島町豊村清兵衛、市小路町正兵衛の四名、郡地は新西町権平、きぬ屋借屋権八の二名、合計一一名である。

しかし「福岡藩町役所記録」⁽¹⁹⁾には元文元年四月五日付「日雇支配人相止、日用頭才判之事」とあるから、この支配人は廃止されたろう。即ち「博多津要録」享保二十一年辰四月付「両市中日雇直段極之事」⁽²⁰⁾によると、日用支配人は廃止し、家中は御用日用頭の支配する日用を雇う。つまり日用頭が惣日雇支配をし、町方は相対雇だが賃金は家中の場合以上ではない。

日雇賃金は第六表の通りである。詳細に規定しているが家上葺、普請、平日用、旅行等に大別出来るが、旅行は領内に限らない。表中aは両町より弍里、三里迄の所の賃金、bは「地廻り、崇福寺、紅葉八幡、住吉辺」に参った場

家上延日用	1.50
普請方日用	1.20
平日用	0.80
行駄昇日用 a	1.50
同 b	1.30
医者衆行駄昇日用一日切 a	1.50
同 一日切 b	1.30
同 半日切	0.60
供日用・使日用 a	1.30
同 c	1.60
同 d	1.20
他国刀指并駕籠昇日用	2.40
同 d	1.90
他国供日用	1.80
同 d	1.35
御國中遠方之所刀指并行駄昇日用	1.90
同 d	1.40
宇美、宰府刀指行駄并昇日用	1.70
重荷物持日用 a	1.50

第6表 享保21年兩市中日雇直段表

合、cは「御國中遠方之所」の場合である。dは「認仕候ハ、」の場合であるが意味は明らかでない。

行駄昇日用は広範圍に使用されているが、日用三〜四人での場合には遠近に關係なく一分下げにする。なお行駄昇日用と供日用、使日用は「夜ニ入」った際には見合の増銀を受取り、他国刀指并駕籠昇日用と他国供日用は、「夜通シ」の節は昼並みの賃銀を受取る。

つぎに「宇美（粕屋郡）・宰府（御笠郡）此兩所辺ニ参候刀指并行駄昇日用」の賃銀は、これと

似かよった道法の所にも適用される。

平日用の賃銀は一日雇切日用の事である。

なお表示以外に井戸堀日用がある。これは所により賃銀に高低があるので一定せず、所の相場に見合った額にする。

日雇は日用下ケ札を請取り、一カ月切の「人払相立帳面」を翌月の半頃に日用頭から兩行司に提出する。日用頭湊町亦七、唐人町太兵衛、その他に本町与兵衛、鍛冶町善六、紺屋町懸り安学橋六右衛門、古門戸町権助、市小路町甚六の六人に日用頭を命ずるから、彼等が御用才判をする。日用の者は毎月一人一分五厘宛支配料を提出する。なお相

対無札では日用を雇ってはならない旨が規定されている。

日用頭と日用支配の人名の關係が明らかでなく、島井の名前がない事情も明らかでない。福岡と博多の關係も不明である。

ところでここに規定されている業種は恐らく以前から実施されていたものだろう。

「福岡藩郡役所記録」⁽²¹⁾には元文元年九月二四日付で「奉公人給米、日用賃之儀相_レり不申趣に候、以後相_レり候様達之事」とある。これは郡方に対する法令ではあるが、恐らく両市中の場合にも日用賃銀は守られない場合があったのではあるまいか。

これより先、享保十七子年の凶作の結果飢死者が多く、その結果日用取が払底したので、「博多津要録」元文二巳年には「嶋井久左衛門桜田伝兵衛旅日用仕組願事」⁽²²⁾として、島井久左衛門と新川端町上桜田屋伝兵衛が旅日雇入込の仕組を立て、御家中と町家の日用に供す事を企てた。兩人は銀五貫目拝借を願ひ、それによって豊後、豊前、中国筋に赴いて日雇の者を連れ来る計画であり、拝借銀の上納は年賦を求めている。

元文五年申七月六日には「旅日用問屋被仰付候事」⁽²³⁾として

嶋井久左衛門

桜田屋伝兵衛

一家中未々奉公人少_カ并日用之者も手支ニ付、中国辺其外隣国々追々呼寄せ候仕組申出候、依之旅奉公人旅日用共ニ問屋申付、願之通文銀四貫五百目ハ借渡シ候、家中并両市中共ニ、手支無之様仕組相立可申事

申ノ七月三日

即ち日雇のみでなく奉公人を含み、地域も中国、九州と考えてよい。

同年申十一月六日、一二日には「旅日用御免ニ付仕組之御触状出申事」として、前記兩人に願の通り仰付けられている。

そして、項を改めて、⁽²⁴⁾旅奉公人、旅日用人足支配は願い通り申付けた。奉公人受状の案文、窃盜の際の弁銀高、病死者を埋葬する寺、奉公人と日用の給米賃銀、及び在郷日用にも札を渡し、持っていない者は市中宿をさせない事について、福岡の名島屋勘右衛門が日用聞次所を極め次第に書付を提出し、それによって家中、町、在、浦方に触れる事になっている。

「福岡藩郡役所記録」には同五年十一月九日付「旅日雇之者共、支配之者より札相渡、無札之者は宿等仕せ申聞敷事」⁽²⁵⁾とある。

「博多津要録」元文六年酉三月には「在郷日雇他国日用脇宿御停止之事」として

一筆申触候、然は先達而相触候通、他国より参候日雇之者、嶋井久左衛門、桜田屋伝兵衛方へ罷越、兩人支配受申等ニ候処、自由ニ脇宿致シ、右兩人支配之者之様に申、日雇取候様ニ相聞候、他国者ニ不限、在郷之者共ニ、脇宿仕候儀御停止ニ候条、右之類ハ宿主越度ニ可申付候、尤町々番屋杯に入込居申と相聞へ候間、右之趣津中端々迄早々可被相触候、以上

酉ノ三月十二日

御役所

樋口藤五郎殿

柴藤小兵衛殿

とある。兩人以外に脇宿があり日雇宿を営業している者の存在を示している。

福岡日雇支配・大坂通日雇万屋喜平次について（藤村）

旅日雇については秀村選三「徳川期北部九州に於ける農村奉公人の諸相」⁽²⁶⁾によると、筑前国怡土郡井原触の事例から「九州各地の文書に於て旅日雇なるものが散見されるのであるが、井原触に於ても多く見出すのである。普通の日雇が村内若くは近村より雇傭せられたのに対し、旅日雇は土地を喪失遊離し、遠隔地より流入せるものでプロレタリア的要素の濃いものである。殆んどが家族を伴い、宿主を頼んで滞在するのが常であった」とし、又「旅日雇は名子とは明かに区別され、法令でも普通の日雇に近いものと意識されている。又特定の家にのみ雇傭されることなく、相当自由に移動しているから、宿主は請人程度のものである様に思ふ」とある。

福岡以外の都市でも九州に旅日用問屋が成立していたのかは確認していない。

当時の雇傭関係、享保期の飢饉事情、他国奉公の事実、旅日雇の存在形態については、秀村選三「近世北九州に於ける奉公人の供給事情」⁽²⁷⁾に詳しい。福岡藩では飢饉の結果労働力が不足し、享保末年から元文期にかけて荒仕子、下女の公定給分を申付けており、他領へ奉公をする事を禁じ、他領からの入百姓、入奉公を認めている。旅日用問屋はこの様な藩の一連の政策の上に存在したものである。そしてこの様な政策の背景となった雇傭関係は、飢饉の一時期にとどまらず、次第に雇傭圈を拡大し他国奉公が一般化していった。他国出身の日雇は増加して行ったと考えられる。福岡に旅日用問屋が成立したのは、この流れの内での都市への集中ではなかったろうか。

さて元文六酉年三月十九日付「日雇賃銭定書之事」⁽²⁸⁾では町方に対して四月一〇日以後は、市中近在の者の賃銀をきめたから町家で雇う際にこれによる事を求め、違反する日用があれば日用頭に届ける事、そして日用頭の札を掲げていない日用を雇わない事、一方では以上に違反して相対賃銀が無札の者を雇った者は重い越度としている。

その賃銀は第七表の通りである。非官駕籠昇の非官とは何か明らかでないが、駕籠昇は平の場合も共に終日の勤めで、一日喰捨米は白米五合宛である。

非官駕籠昇	米1俵=勤日	18日
平非官駕籠昇	米1俵=勤日	20日
	文銀	匁
草家上ふき井土堀日用		2.80
普請方駕籠昇日用		2.00
平日用		1.50
御用日用		1.50

第7表 元文6年4月日雇賃銀表

	文銀	匁
草家上登		2.70
井土堀日用		2.70
普請方		1.50
駕籠昇日用		1.50
平日用		1.00
御出野日用		1.80
御館御用日用		1.50

第8表 寛保元年5月日雇賃銀表

ている場合にも吟味して事実ならこれも奉行所に申出る。

以上を守り、四月一〇日限り無札の者がいないように支配する事になっている。

寛保元酉年五月「日雇支配人并ニ賃銀定之事」によると、日用頭に今回博多浜口町嶋井久左衛門が仰付けられ、福岡に下支配として本町利兵衛、喜兵衛、港町平兵衛がおかれ日用支配に当る事になった。前記三月九日付の日用頭四名との関係は明らかでない。島井久左衛門の旅日用問屋はこの日用頭に含くまれたのかは明らかでない。

日用賃銀は第八表の通りである。御館御用日用は御城下一里四方の賃銀で、二里以上の場合には一里銀二分宛増銀をする。

この御定賃銀は御用御家中、町家共に同様の適用である。違反した日用の者があった場合には日用頭に届ける。

福岡日雇支配・大坂通日雇万屋喜平次について（藤村）

平日用は御城下一里四方の賃銀であり、二里以上は一里につき二分宛増銀である。御用日用はこの区別なしの額である。これで賃銀については終る。

つぎに日用頭は港町亦七、唐人町正七、同町太兵衛、博多川端町下甚七の四名であり、彼等は日用頭として両市中近在の日用の者を支配し札を渡す。無札の者は日用に出られないようにする。札を受けた日用の者から一カ年銀六〇文宛を月割に請取り、不納の者からは札を取上げる。そして無札で雇われた者を町奉行所に申立て、家中町家共に雇った日用の賃銀が違反し

両市中日用の者は日用頭からさげ札を渡す筈で、日雇の者は一人につき支配料年額錢六〇文を月割で日用頭に差出す。無札の日用の者が雇われた場合には日用頭が改める。御家中、町家で雇う日用は相對雇の筈であり、六月朔日以後は日用頭の札を提げない日用を雇ってはならない事にしている。

寛保元年酉七月二〇日付「日雇賃錢再御触之事」によると、当五月に定めた第八表の日用賃銀はそれ以前に申付けた第七表より減額して触れたものだが、差支もあり紛らわしいので、又々改めたとして第九表の賃銀を定めている。

御用日用は「五月触之通」とあるものである。

ついで板家上葺、瓦家上葺、草屋根葺について、「草家上ふき、唯今まで日用ニ而雇候得共、屋上ふき同前之儀ニ候条、瓦草家上共ニ、板家上ふき同前に賃銀賃米相極、日用に指除ケ可申候事」として日用から除外し、「三家上ふき外之細工を仕日用之者、瓦草家上ふき候者へ、勿論細工日用之賃銀たるへき事」と賃銀は細工日用として性格付けた別系統の額である。

僅か五カ月間に三度賃銀改定の背景が何んであったかは明らかでない。しかも「福岡藩町役所記録」に寛保元年一二月二二日付「御用日用賃錢増願之事」⁽³¹⁾同年九月八日付「長崎御供より雇日用定之事」⁽³²⁾とあるので、具体的な事は明らかでないが矢張り賃銀の動きは固定していない。

井土堀日用	3.00
普請細工并駕籠舁日用	2.30
上 日 雇	1.50
下 日 雇	1.00
	文銀
御用日用 (御出野)	1.80
御用日用 (御館)	1.50

第9表 寛保元年7月日雇賃銀表

ところで「博多津要録」寛保元年酉四月十五日付「嶋井久左衛門三人扶持拝領被仰付候事」によると、嶋井久左衛門は先祖が権現様から拝領の御軍配御団を若殿様にさしあげ永代三人扶持を仰付けられている。これと五月の日用頭仰付との関係は明らかでない。なお「島井氏年録」⁽³³⁾によると文禄三年に島井宗室は徳川家康から軍配扇を拝領してい

る。

「博多津要録」の寛保二戊年五月一日付「神屋嶋井運上目附ニ被仰付候事」によると、神屋善四郎と嶋井久左衛門は運上方目付役に仰付けられたが、支配料は御扶持を理由に下されず、下支配を取立て実施するものであった。従ってこれは日用頭とは関係がない。

同戊年一〇月一二日付「嶋井久左衛門拝借銀年賦被仰付候事」では、嶋井久左衛門の屋敷は天正一八年町割の際に表口一三間、入二八間が諸公役御免になり、これは黒田家御入国後も同様であった。不勝手のため八カ年以前に表口九間を最初は質物に入れ、その後売切にした。「去々年相願、旅奉公人日用之仕組ニ付、右九間之所借受候而、旅人召置候、然処ニ、右地所売屋敷ニ相成、旅人小屋解除ケ候様ニ申候、左候而ハ、旅人召置候所茂無之及難儀候」とあり、前記売渡した場所を借受け小屋を設けて旅奉公人を宿らしている。これで事実上人宿である事が判る。その地所が売屋敷になり小屋の解体を求められたので、旅日用問屋として去秋に仰付けられた際の拝借金は当年一〇月切返納の筈であるが、その内の島井分銀一貫五百目を寛保三亥年冬から三カ年賦に上納を許るされ、これで屋敷を買取る事になっている。

この結果寛保三亥年正月「島井久左衛門屋敷買戻シ候ニ付、前之通ニ又々無役ニ被仰付候事」によると、享保二〇卯年売払の分は寛保二年一二月に買戻され、以前の通り老軒に合せ券帳面を改めて公役御免を願出た。格別の家柄を理由に許可されている。島井久左衛門は旅奉公人、旅日用を含めての日用頭の営業だろう。

つぎに「福岡藩町役所記録」の延享四年三月一〇日付「日雇賃銭定之事」⁽³⁵⁾には、元文六四年に日雇賃銀を定めたが改めて日雇頭に申付けるとし、先ず長崎御直成の際の日雇、通馬の賃銀はその時々⁽³⁶⁾に詮議して申付ける事とし、その外の日雇直段は第一〇表の通りで、「博多津要録」の同日付「両市中日雇賃銀相究申事」でも同様である。

1人ニ付賃銀	
御供日用	1.44匁
小使日用	1.20
上日用	1.12
下日用	0.80
井戸堀日用	2.40
〔普請方〕	
細工日用	1.84
〔駕籠昇, 御国内何方にても〕	
駕籠昇日用	2.90
平日用	2.40
御国内逗留之間同	1.50
〔臨時長崎隣国共〕	
同駕籠昇日用	3.90
平日用	3.35
同滞留	1.80

第10表 延享4年3月日雇直段表

「博多津要録」の延享二年閏二月一九日付「嶋井久左衛門日雇仕入銀年賦ニ被仰付事」⁽³⁶⁾には、日雇支配の者は支配料として日用二〇人指出しについて一人宛の夫を受取ってきたが、嶋井久左衛門が日用頭を申付けられてからは、その代りに年銀五貫目を拝借し翌暮上納、次いで其の暮に拝借を繰してきたが、延享元年拝借の五貫目は同二年暮から七カ年賦に上納を申付ける事になった。なお同二年閏二月二八日付「嶋井久左衛門方々へ指出候日用賃減少相願申事」⁽³⁷⁾には作事の平日雇賃銀一人一匁五分宛から「銀ニ錢ヲ歩有之ため」来正月には一匁四分宛とある。

ついで寛延四年四月一三日付「嶋井久左衛門身退キ悴善兵衛へ相続被仰付候事」⁽³⁸⁾、宝暦二年付「嶋井善兵衛依頼改メ日雇頭被仰付候事」⁽³⁹⁾がある。悴善兵衛が三人扶持と日雇頭の役を相続し、宝暦元年春以来の仕組で日用御用は藩の作事所から直接支配に命じて人足を雇うが、以後は日雇頭を経由する事を求めて許可された。その際の下支配、即ち日雇支配三名の受持分担は、(A)三名が綿蔵、利兵衛、亦兵衛の順で月一〇日交代(一)御普請方御用、(B)湊町綿蔵(二)御鎗方、(三)実植方、(C)湊町又兵衛(四)御仕立所、(五)御船方、(D)本町利兵衛(六)御用所、(七)御直段方、(八)御茶屋、(E)三名の交代(九)旅出御用、即ち参勤往来、長崎越座の御用である。⁽⁴⁰⁾

これが博多、福岡共通かどうかは確認していない。なお嶋井については日雇と扶持の事柄に限定し他は触れない。

「博多津要録」の宝暦七年五月付「嶋井善兵衛日用下支配之者と出入之事」⁽⁴¹⁾同九年七月一日付「日用頭三人ニ而

地旅御用打込ニ相勤申候事⁽⁴²⁾ 宝暦七年に島井善兵衛が下支配の湊町次蔵と又兵衛の肩銀滞納を理由に交迭を願出たが年に肩銀二五〇目と、長崎御成毎六〇目宛指出を条件に許るされず、同八年一〇月から、(一)御普請方御用は湊町和多蔵、(二)の内で長崎御供立は又兵衛と忠右衛門に区分されたが、和多蔵の願出により同九年七月に「地(一一八)旅(九)共ニ打込」と三人の日雇御用が命ぜられ、島井善兵衛にも通知された。これにより業種と藩の機構との結びつきが知られる。⁽⁴³⁾ これより先き宝暦二年六月付「日雇之者ニて仕ヲ致儀究候事⁽⁴⁴⁾」として、叫壁、荒壁、かま塗、白土目塗を許るし、白土とさひ土を掛けて中塗をする事は「こて取ヲ取上」とある。

	賃	銭文
御供日用	1日1人ニ付	96
小使日用	1日1人ニ付	96
普請方細工日用	1日1人ニ付	100
平日用	1日1人ニ付	78
下日用	1日1人ニ付	60
草家上葺瓦家上葺共	1日1人ニ付	120
井土堀日用	1日1人ニ付	180
木屋番日用	昼夜1人ニ付	90
地廻駕籠昇日用	1日1人ニ付	120
長崎隣国同上	1日1人ニ付	270
長崎隣国平日用	1日1人ニ付	234
長崎隣国居留り駕籠日用平共	1日1人ニ付	120
御城下二里以上駕籠昇日用	1日1人ニ付	174
同上平日用	1日1人ニ付	144
御国内居留り駕籠昇平日用共	1日1人ニ付	90
米春日用	上々白米1俵ニ付	65
同上	中白米1俵ニ付	55

第11表 明和元年12月日雇賃銭表

つぎに「福岡藩町役所記録」の明和元年十一月一七日付「日雇賃銭日雇頭取歩銭之指引相止、札代を以割符之事⁽⁴⁵⁾」による一二月朔日付改の日雇賃銭は第一一表の通りである。御供日用は五ツ時から七ツ半時迄の間の勤めで、これに過不足の際には刻割で賃金を増減する。普請方細工日用、平日用、下日用、草家上葺瓦家上葺共、井土堀日用、地廻駕籠昇日用も同様である。小使日用は夜泊りの場合には、一夜一人に付き五四文宛である。長崎隣国の駕籠昇日用、平日用、居留り駕籠日用平共は、賃金以外に旅飯は渡さない。御城下二里以上と御国内居留りの駕籠昇日用と平日用は三度の飯料を別段には渡さない。

この外に別項を建て、大工、大鋸、砂官、家上屋、石屋、其外一切職人の一日一人宛賃金は一三二文宛と定め、御用と家中町在との賃金に從來不同があったのを、今後家中町郡浦共に御用召仕賃金と同一とし、一日役は朝五ツ時から晩七ツ半時迄の一日四時半とした。刻限に過不足は時割で増減する。御用同様に賃金に高下をつける。そしてこれを遵守しなければならないのは日雇定書の通りだが、大工、大鋸、砂官の高下は各々その頭が定め、頭から札が渡されるのである。

つまり日雇定書によるが、大工頭等により日雇頭の支配ではない。

以上大略「博多津要録」を中心として日雇関係を辿った。

三 人足次所

「博多津要録」の寛保二戌年正月「人足次所普請之事」によると、人足次所、馬立所、馬指居宅が大破したので普請を仰付けられている。この場合の人足について考えたい。

同三亥年正月二三日付「次所人足仕あふりと申儀、向後被相止候事」として、次所夫を仕うのに、「只今迄あぶりニ立五歩三步と相居申候得共、此已後あふりと申儀相止候、いつれ之夫ニ而茂彦人ニ相立テ申候」ように仰付けられている。

ついで同三亥年二月付「次所公役人足仕、向後相改申事」には、人足仕一式仕様目録として年行司中が二月に提出した書付に附紙を付して三月四日に仰付けられた仕様書が記されている。

即ち(一)御締方、御紺指衆、又は紺場から方々宿次御用状一切と御獵方の分は御役所御証拠がなくても人足を指出してきたが、どうするか。「附紙、從來通りにする。追って詮儀上を申付ける。」

(二)御諸士様方に人足を渡す事は御役所御証拠なしには渡さない。「御知方之御方様」へは以前から渡していない。御郡方は賃錢を払った場合には人足を出す。御諸士様で御郡から入り込み博多で人足次をする様に毎度仰付けられて難儀をするが、これはどうするか。「郡から次いで来た分は、賃錢を受取って人足を指出す事、中途次は人足を指出さない。」

但し、福岡次所、又は二日市、笹栗、宰府、箱崎の口々から次掛りの人足は御証拠なしでも指出すべきか。〔右同断〕

(三)御直勤様方、陪臣衆が御代官所杯に出かけた帰りの際に人足を指出す事を仰られる。又御胤の帰りに同様の事がある。これ迄は指出していないが、「稠敷」く仰せらる方があり挨拶に難儀をする事がある。これらはどうするか。但し御家老様方はじめ陪臣衆には渡していない。「これ迄通り指出さない。」稠敷被申」る郡から持送りの分は賃錢を受取って人足を指出す。中途次は指出さない」

(四)所々御代官様には往来共に今迄人足を指出していない。以後も従来通りでよいか。

次に他国衆が人足を取る場合は、以前からの通り駄賃帳をみて前々の宿から次掛であれば指出すべきで、中途次は指出さない事でよいか。「代官衆には指出さなくてよい。旅人には駄賃帳のある衆にも、中途次にでも共に人足を指出す事」

(五)人足雇立才判を定めた時には、御用夫の事を申来た場合の処置として、その事を才判人に申談するか、普段御用手紙等を受次いだ時の様に帳面に記して置いて才判人に渡すか迄の手続でよいか。

それとも彼等の職掌は人足雇立の才判計りで、御用筋の事を取捌き人足を召仕うのは従来通り当番惣代の申付けによるのか。

「一切の御用の事は従来通り当番惣代から才判をすべきであり、人足才判人は雇立て丈けに當る」

遠行、夜中に御用状を遣す際には従来人足式人を遣っているがそれでよいか。「従来通り兩人遣いでよい」

(4) 人足雇立才判人が人足を雇いに赴いている時に急の御用夫があつた場合、又他国衆が急に人足を取る場合、これは才判人不在だが何うすればよいか。「附紙はない。(5) から考えれば才判の職掌ではないだろう」

(6) 御役人様方から人足を指出すように申來つた時も、御証拠が付いていない場合は、何の役人であっても、人足を渡さなくてよいか。「その通りである」

以上の通りで、次所は人足繼所と考えられる。この他に惣代の次所当番について記している。

同三亥年二月一六日付「次所現夫仕人足御役所支配ニ相成申事」によると、寛保元酉年に兩市中公役を現夫にした所「日々商売仕輕キ者」にとつて、自分が勤めると渡世に差支え、代りを雇うと高値のため、結局賃錢を出して年寄支配受方を町々から願出た。受方は申付けられなかったが、同二戌年人夫入切は福岡一二二九八人、博多二一九八九人で、その内で現夫で勤めた人は福岡二七五〇人、博多四五〇〇人である。これを参考にして入切夫高に應じて福岡は一人年四度勤めで一人六匁七分五厘宛、博多は五度勤めで一人七匁五分宛とし、月割で年寄が取立て町役所に納める事とし、兩市中に一人宛役人を定めて雇人で公役を実施する事になっている。

従つて前記の人足才判人が雇立てに従事するのであらう。

同三亥年三月付「次所人足錢又々減少願出候處、減少被仰付并定夫人数減少之事」には、亥二月付で、兩市中公役現夫仕いを申付けた所断りを申出たので願ひ通りの歩役錢をきめたと、前述の事情を記るし、ついで歩銀が高額で難儀として福岡一人月額二四文宛、博多同二五文宛差出を願出た。その結果最初に申付けた「銀高を八歩二厘三毛ニ減少申付」けた。右の銀高の内から役人役料も渡す事とし、三月から実施し年寄が取立て町役所に納める。即ち

一巻歩五厘八毛　ハ

三拾八文内六文　下割当り

とある。ついで御奉行衆寄合の上で、これ迄次所詰人足は一〇人宛昼夜詰切であつたが、今回の御仕組により三人減じて七人昼夜詰切雇立る様に仰出された。

これに対して七人の次所詰人足では、諸事触出し、箱崎宿次の様な仕事は困難である。

更に七人の内で一人は町役所に詰切で実働は六人であるからと強張したのに対し、御奉行衆は箱崎行、及び触出の町々の御用筋は年番判形で次所に申遣して人足を受取り使用する事とした。その際に箱崎行については次所当番と才判人から帳面に記しておく事にし、人員は前記六人の内で実施する。これは次掛け持人足と同様に処理している訳である。

これに関連して三月一〇日に江戸下り御飛脚のため、次所は人足指出を求められたが、六人の詰人足は全部出払つていた。帰る迄待つ様に申渡したが出来ない程の急ぎとの事で、次所当番惣代は、急場の手当をした。翌日年番御役所に申告したら、その様な際には年番に申出て証拠を取って指出す様にとの事であつた。

同三亥年三月一三日付「次所人足支配人極候事」では、両市中人足は御役所御手支配に今回の御仕組によりなつたので、人足支配方役を福岡は簀子町惣右衛門、博多は麴屋番富屋伊右衛門が受持になった。一人年六百目宛と紙墨代は両市中の請持である。

次所人足支配は富屋伊右衛門に仰付けられたから、従来の惣代才判は三月一四日切で終る。一五日からは伊右衛門方が次所に出勤し、人足雇立賃金は即座に渡し、月々の御算用は翌月初に年行司と支配方伊右衛門から御奉行に直接報告する。人足雇立賃金は一度に三百目宛御蔵出して伊右衛門に渡す。

旅人通り衆については、従来は御究の賃錢を受取り次所から次いできたが、今回の御仕組により、通り衆への人足指出しは掛ヶ町、糍屋番、片土居町、古門戸町、妙楽寺新町の五カ町から出す事とし、賃錢は旅人と直接に相對で受取る。

現人足切錢は一人につき三三文宛ときまっているが、右の五カ町は人足指出しを理由に一人一六文宛である。賃錢は直接五ヶ町が受取る。

つぎに両市中人足雇立役は望みの者に申付け、役料として人足錢の内で年額六百目を渡す。そして福岡は簀子町人馬次所、博多は古門戸町次所に出動し、人足仕方は町奉行役所判形で雇立て一カ月切に算用をする。

この両市中人馬次所での旅人雇の人足賃錢については、従来は人足受の者が支配し、制札前賃錢不足分は人足錢で賄ってきたが、これでは人足次が延引するので、旅人雇人足賃は制札前賃錢ではなく他国での通り、割増をきめておいて相對次第にする。旅人雇人足請持は福岡は簀子町、博多は古門戸町、掛ヶ町、妙楽寺新町、片土居町、糍屋番とし、これらの町は並人足錢は五割減で差出す。若し人足次遲滞の場合は科料として並人足錢五割増納をさせる。これと前記五カ町との關係は明らかでない。

さてこの人足仕いの沿革を通じて嶋井久左衛門については、博多人足召仕いは津中惣夫高二一三九人六歩一厘を、津中町々片廻り軒公役で家別間數に掛ける。表口間數により町々巻帳に人歩高が記るされており、これにより現人足を次所に差出し、次所には当番の惣代が人足仕の受次を仕来ってきた。

然ル処ニ、其以後嶋井久左衛門為御救御願申上、中嶋町鏡屋清兵衛受方ニ相成候、下受店屋町上錢屋久五郎受持、嶋井方へ御肩銀出シ、夫屯人ニ付五分八厘ニ而、受方仕り申候

とあり、これは正徳五年島井善兵衛の事ではあるまいか。受方、下受の存在がわかる。

ついで享保一七七年凶作のため、「津中へ余分之滯出来仕候故」、同一八丑年四月に夫一人に付き三厘下げを願ったが、理由は尤と認められたが、直段を下げると嶋井方へ他の御救手段を仰付けないといけないとして認められず、結局寛保期の御仕組に至っている。

前述の通り寛保三年の御仕組の機構、人的構成は日雇頭の島井久左衛門と区別して考えるべきものである。しかし正徳・元文期の人足次所での島井の位置、及び初期から中期にかけての北九州の労働力の成立事情については現在の私にとっては明らかでない点が多い。従って元文期以前の次所人足支配と日雇支配の關係は後考にまきたい。しかし矢張り寛保期以後は区別して考えるべきだろう。雇傭される労働力は兩所で無關係かどうかは不明である。

この点については小倉藩の場合に「天保九戌年御巡見御上使御答書」に「御大名様方、又者諸国侍百姓商人、其外一切旅人往来之差支無之哉と御尋之時」と想定して、小倉は宿町であり、人馬継所があつて御朱印付等の御用、大名、旅人の往来は人馬船共に差支ないとし「其上、馬差人足頭と申町役人も相立居申候段、可申上候」とある。この人足頭が福岡藩の場合の次所人足支配、日雇支配のいずれに当るかは確認していない。

再び「博多津要録」によると、寛保三亥年四月八日付「次所夫仕一切証拠無シ受次不相成候事」では、次所夫仕は役所からきた御手紙呼出し等迄御証拠なしには受次がない。

つぎに人足支配と当番惣代の關係は、同三亥年六月付「次所当番惣代詰所紙墨代之事」では、次所入用紙墨は当番方でなく支配方へ遣し支配方の帳面で済ませると御奉行衆が申渡した所、惣代中から当番の帳面がなくては御用が難かしく間違のあつた際に処理出来ないといふ反論が出て從來通りになっている。又同三亥年一〇月七日付「次所当番惣代月々ニ人足算用罷出申事」には、月々の次所人足算用の際には当番の惣代からも人足払帳を持参し、人足支配方伊右衛門同道で役所に出頭して算用する事を命じている。

矢張り当番惣代の従来からの役割は続いていると考えたい。⁽⁴⁷⁾

四 天保・嘉永期の日雇賃銭

古松軒古川辰「西遊雜記」⁽⁴⁸⁾卷之七には、天明三年に通過した福岡について

博多より僅なる橋を以て隔とし、町つづきにして雙方の市中凡を云一万二千余軒、人物言語もあしからずして諸品自由はんじやうの所なり。博多の地は古き湊(中略)倡家も見へ、諸国への通路もよき所なり。海は深からずして大船今は入津ならず。福岡の地は慶長以来の所にて。(中略)御城は平城にて天守なし。よき城なりと土人語りしなり。とある。福岡は城下町で、博多は商人町であつた。

これから福岡大工町森田家旧蔵文書により考察するが、是迄に日雇賃銭について触れてきたので、便宜上ここでは日雇賃銭から始める。以下同文書による場合には註記しない。

明和から約八〇年後の天保一四卯年二月付御町役所宛日雇支配和多蔵、忠五郎、喜平次「日雇賃銭見込申出候様被仰付候寛」によると、是迄の賃銭は上日雇二四〇文、平日雇二一〇文であり、正月五カ日、五節句、盆一三―五日、一二月二八―九日は二人役で二月二五―七日、盆一〇―一二日は一人半役である。つぎに御使者御代参御雇賃銭は地廻り賃銭二人役を是迄申請してきた。

この賃銭を今度きめるため見込申出を求められ申合の結果、近來の米価引上りのため賃銭引下げを命ぜられては難渋するが、「当時之御時節柄之御儀」であるから、日雇一人賃銭の内で一〇文位も引下げて決定すればよからうとしている。御時節柄とは幕府の天保改革の職人日雇賃銭公定の影響だろう。

なお「遠藤文書」⁽⁴⁹⁾によると、同年正月長崎御越雇指向の長崎并近国行日雇賃銭は第一二表の通りで矢張り賃下げ

になつてゐる。この直段は長崎滞在中、道中共に別段に旅飯は渡さない。これも一連の賃下げの一つであらう。

	當時賃文	新賃文
駕上平	780	600
籠日	750	570
昇雇	720	558

第12表 天保14年正月長崎・近国行
供方日雇賃銭表

	1日1人賃銀	日数30日見込	日数30日越節
侍	銀	5.00	銀 4.20
分	銀	5.20	銀 4.20
御雇	銀	4.20	銀 3.20
駕籠			
御行懸御道具持仲間日雇			

第13表 (弘化2) 已年長崎御手当
御雇賃銀見込表

つぎに弘化二年と推測される巳四月付御町御役所宛日雇支配中「口上之覚」には、長崎御手当について町人者を御家中家来に召仕う事は兼ての御達しの通りである。町人者を雇うのは「相対雇ニも可被仰付哉」、相対雇の一日一人賃銀見込は第一三表の通りであるが、この直段は賄は雇主から下されたとした見込である。町役所は出来る丈けこの額から更に引詰める事を求め、日雇支配中は評議の上でこれを無理とし、若し引下げても実際にそれで雇えなければ長崎に赴けないおそれがある事を指摘している。結果は明らかでない。

長崎は福岡藩が寛永二〇年以來佐賀藩と交代で番衛を仰付けられてゐるためである。⁽⁵⁰⁾そして日雇支配喜平次とは万屋森田氏の事である。

嘉永三年戊辰四月付御鎗方御役所宛日雇支配「乍恐奉願上口上之覚」によると、御役所御用日雇賃銭は米穀高値や日雇賃銭の動きに応じて増減してきた。天保一四卯年御改正の際には文化一五寅年の御定賃銭の額が仰付けられた。当時と異なり近年は御獵御用等に召仕われるので度々増賃を願出ていたが、嘉永二酉年冬から三年春に至り格別の米穀高値のため足し銭がなくては勤まらないので、文政九年御定賃銭の額迄増加を願った。その関係賃銭は第一四表の通りである。

しかし願書提出後大風のため改めて願書を提出している。即ち嘉永三年戌八月付御鎗方御役所宛日雇支配「乍恐奉

願上口上之覚」によると、前記の通りであったが当夏の米穀異常高値のため文政九年御定賃錢の他になお二割増賃を願出た。そして将来米価下落しても引下げた額を文政九年御定賃錢に据えて貰えなければ困るとしている。

嘉永三年戌一〇月一三日付で御奉行から、「当年中は迄之賃錢ニ弐割増被仰付候」旨の書付が渡された。御聞濟仰付と註しているから前記の願の額であろう。なお御作事と同日御呼出しとあるから、御作事方御用日雇賃錢についても同様の願が出されて許されているのだろう。

嘉永三年四月に御構役所に願書を提出しているが内容は不明である。八月付同役所願書によると、当時の御役所御用日雇賃錢は第一五表の通りであるが、矢張り二割増を願い一〇月二五日に当年中に限り許可されている。

又同三戌年八月二六日付御普請役所宛日雇支配七次郎、和多蔵、忠五郎、喜平次「乍恐奉願上口上之覚（御作事願）」では、同様の理由で第一六表の通り願出したが、一〇月一三日に第一七表の通り当時二割増が認められた。両表の金額の関係については明らかでない。後考にまちたい。

さて同年一二月には御作事、御鎗方、御構方日雇賃増期間の延長を願出た結果、翌四年二月八日に御普請役所に呼出され、当三月迄の継続が認められている。

福岡藩の機構を確認していないので、関係日雇業務の整備が出来ず混乱するが、この点なお研究したい。

	増賃 文 丁	御定賃 文 丁	當時 文 丁	文政 文 丁	御定賃 文 丁	増賃 文 丁
昼夜小使日雇	44	246			290	
夜増小使日雇	10	140			150	
御供日雇・平日雇	24	146			170	
二里以上 同上	30	200			230	
御滞座 同上	44	366			410	
御滞度小指之者	40	400			440	

第14表 嘉永3年御鎗方御用日雇賃錢表

御 供 日 雇・平 日 雇	四時半勤	文	146
駕 籠・挾 箱	四時半勤		147
小 指	四時半勤		180
二里以上 駕 籠・挾箱	四時半勤		250
二里以上 供日雇・平日雇	四時半勤		200
二里以上 小 差	四時半勤		250
御 滞 度 駕 籠・挾箱	時廻なし御滞座		500
御滞座 御供日雇・平日雇	時廻なし御泊掛		366
御 滞 座 小 指	時廻なし御泊掛		400
合 羽 損 料	1枚ニ付		40

第 15 表 嘉永 3 年御構当時御定賃銭表

	賃銭 文	増願額 文	合 計 文
井 戸 堀	270	81	351
草家上・瓦葺	240	72	312
頭取 日 雇	231	69	300
細 工 日 雇	210	63	273
平 日 雇	180	54	234
下 日 雇	120	36	156

第 16 表 嘉永 3 年 8 月御作事日雇賃銭
并増願賃銭表

	文	肩 文	2 割増 証拠前 文
井 戸 堀	310.0	14.0	324.0
草家上・瓦葺	275.0	13.0	288.0
頭 取	265.0	12.2	277.2
細 工	240.0	12.0	252.0
平	200.0	16.0	216.0
下	130.0	14.0	144.0

第 17 表 嘉永 3 年 10 月御作事日雇賃銭表

再び日雇賃銭であるが、四年三月一七日付御普請役所、御鎗方役所、御構役所宛日雇支配喜平次、忠五郎、和多藏、七次郎「願書」は米穀値段が下落しないのを理由に増銭の継続を願い、四月晦日に当六月迄の延長を認められたが、同六月二一日付御普請、御鎗方、御構役所宛日雇支配四人「乍恐奉願上口上之覚」では、六月に更に継続を願っており、亥八月迄許可された。その後米価が下落し、大工作料も下直になったので、日雇賃銭二割増は嘉永四亥年八月迄で以後は元の賃銭に戻っている。

しかし同六年丑四月二〇日には御鎗方日雇賃金について、従来文化一五年御定賃金によっているが、米穀諸式高値を理由に文政九戌年御定賃金に改定を願出ている。これについて侍従様御下国も近い事もあげている。侍従とはまだ相統していないが一二代黒田長知であろう。なお御構役所にも同様の願を出している。

ついで同丑年十一月付御鎗方役所宛日雇支配中「乍恐奉願上口上之覚」では、現在の賃金では雇立が困難だとして当四月願書の許可を求め、客観情勢として町方が既に日雇賃金増を触流しているので現実に雇立が出来ないとしている。

結果は明らかでない。しかし同年と推測される万屋喜平次、万屋又次、炭屋又兵衛の侍従様御国達兩道中通人馬の御国中間賃銀が天保一五辰年仕法高でなく文政元寅年仕法高になっているから、町方の事もあるし増金は許可されたのではあるまいか。

井	戸	堀	文
草	家	葺	360
細	上	瓦	330
上	工	雇	330
平	日	雇	330
下	日	雇	300
	日	雇	180

第18表 嘉永3年8月御家中郡町浦
日用賃金表

		御納戸頭以上	御次廻
		文	文
上	日	雇	678
中	日	雇	644
平	日	雇	630
			548

第19表 嘉永3年8月御家中長崎・近
国行日雇賃金表(1人1日)

町方については大風の後で、嘉永三戌年八月二八日付御町奉行宛仕舞(嶋井)久衛門「願書」によると、嶋井久衛門は日雇頭ではあるが名目斗りで、日雇賃金定もなく、無札で御作事日雇等に従事する者がいて判元生所も不明で日雇支配が困る場合が起きている。そのため嶋井から札を渡して札金を徴し、賃金を定めて取締るよう両市中近在浦々に御触達を願っているが、当時の御定賃金は御家中郡町浦日雇が第一八表、御家中様長崎行、近国行御雇日雇は第一九表の通りである。前者の上日雇は

御家中召仕いの御供日雇で陸尺、道具箱、長柄、平日雇は杵籠、笠籠、竹馬であり、後者の長崎御雇賃金は、日数

八、九日の往来でも一〇日分の賃金を渡す事としている。
同年一〇月一三日に願ひ通り聞届られ、触が出された。そ

料	文	389
掘	錢	360
家上	文	330
日雇	錢	330
日雇	文	300
日雇	錢	180

第20表 嘉永3年10月御家中郡町浦日雇賃金表

廻文	御納戸頭以上	錢	文
600	678	644	570
558	630		

第21表 嘉永3年10月御家中長崎・近国行日雇賃金表

丁	薪百斤	石1	炭俵文	塩入1斗俵文	瓦物1枚文	茅1抱文	印品	諸物文
1	8.0	2.0	7.0	0.6	1.5	12.0		
2	16.0	3.0	10.0	1.0	2.0	20.0		
3	24.0	4.0	13.0	1.5	2.5	30.0		
4	24.0	5.0	16.0	1.7	3.0	36.0		
5	32.0	6.0	19.0	2.0	3.5	42.0		
6	32.0	6.5	22.0		4.0	48.0		
7	38.0	7.0	25.0		4.5	54.0		
8	38.0	7.5	28.0		5.0	60.0		
9	42.0	9.0	35.0		5.5	66.0		
10	42.0	9.0	35.0		6.0	72.0		

第22表 嘉永3年10月荷物日雇賃金表

れによると既に天保六年にも島井久左衛門支配が仰付けられているが、これは福岡藩の天保改革の一環としてだろう。今回は提札を渡して月一人銭八文を島井に渡し取締るものである。その際の賃金は御家中郡町浦日雇が第二〇表、御家中長崎・近国行雇日雇が第二一表である。後者は当時定賃金だが米穀の高値の場合にはその時々旅籠増等

で増減する。

その他に荷物日雇賃錢があり、第二三表の通りで、薪、石炭、塩、瓦、茅、印物諸品々が内容である。なおこの他に米搗日雇があり一俵につき米一升宛の賃錢である。

嶋井久左衛門から日雇札を取調べるので申合せて改頭取が立てられたが、札は嶋井が直渡である。

嘉永五子年閏二月「御町役所日雇賃錢御定之事」によると、前記三年の賃錢は、御家中井町郡浦日雇賃錢として第二三表の通りに改定され、島井久左衛門の元に申し出ない無札日雇稼の取締が問題になっている。ついで同六丑年七

月二五日付「大工作料并諸日雇賃錢等御定ニ相成候事」では御触が出され賃錢は第二三表の通りであり、朝出は二歩増になる。御定賃錢は町役所に掛札し米値段に依じて割替をする事になっている。

以後も変動があったと思うが明らかでない。

島井久左衛門については、慶応二年二月「博多店運上帳」⁽⁵³⁾に浜口町上で神屋善四郎と共同で営業は「旅出雜穀」とあり、同年運上銀は銀五〇〇匁となっている。又万延元年と推測される文久二年正月写「福岡藩家中分限帳」⁽⁵⁴⁾には、両市中町家御扶持の内三人扶持として島井久右衛門がみえている。

第23表 嘉永5年諸日雇賃錢表

年月文	330	年月文	353
嘉永5年	300	嘉永6年	345
閏2月	266	丁錢	293
	228		263
	150		183
堀上日雇			
土家上日雇			
井瓦草・日雇			
細工日雇			
平日雇			
下日雇			

五 万屋森田氏

森田家旧蔵文書の内では、嘉永三年に引用されている「西之家券帳前之覚」に「宝暦年中直ス、森田屋喜八」として表口二間三尺二寸五歩、入一五間二尺三寸とあるのが最古の年である。これは宝暦

年中に大工町に買入れた明治初年迄の住居であり、当時は森田屋喜八であつた事を示している。
ついで享和元年につぎの文書がある。

永代不易申合証文之事

一今度永代不易家名相互ニ為取統、貴殿御請持御用之内、株分ケ之儀、貴殿為名代と江戸諸方等程能相勤候趣、旧
杵九十郎様、平石権平様、根元御存知被成候通ニ付、左之通永代御譲リ渡可被下段、生々世々互ニ助合少シ之趣
略茂無之様、急度陸敷申合、忘却仕間鋪候事

覚

一近江屋仁右衛門江被仰置候東海道通日雇御用之株、同人差支ニ付、先年貴殿米屋弥助右株相受持、御上納金御
兩所請持ニ而御用筋被勤来候処、此節拙者江永代御譲リ渡被下候ニ付、仁右衛門株ニ懸リ候少之御用たり共、弥
助申合永々相勤可申候、御上納金未余分ニ御座候儀茂承知仕居申候、是又同人申合屹度上納可申上候、右ニ付貴
殿本株ニ懸リ少之儀たり共、異儀不申候、已後詰方

御参府之節ニ而候而も、自然貴殿指合之節ハ早速罷出、名代相勤為宜候様取斗可中事

右之通株分ケ之儀、御兩所様御聞通之上者、子孫ニ至候而、自然貴殿方ニ対し隔意之次第義御座候節者、御譲渡
之株御取上ケ可被成、其節一言之子細申間敷候、為後日仍而証文如件

森田喜平次

享和元年酉九月

上野又七殿

福岡日雇支配・大坂通日雇万屋喜平次について（藤村）

即ち享和元年九月に東海道通日雇御用の株について森田喜平次から上野又七に宛てた永代不易申合証文であり、他に逆に上野又七から森田喜平次に宛てた同年月付の永代不易申合証文がある。

両証文によると、近江屋仁右衛門が勤めてきた東海道通日雇御用株を先年上野又七と米屋弥助が受持ち、近江屋の拝借金を兩人が上納し御用筋を勤めてきた。又七は祖父以来従事したとあるが、これが近江屋の下請でか、譲請けが祖父の時か不明である。そして森田喜平次がしっかりと受持先がないので一族陸合のため彼に又七の御用向の内から株分けし、この又七分を永代に譲渡す。以後は喜平次と米屋弥助が申合せて勤め、拝借金の残分も上納する事になっている。

なお今後喜平次と又七は互に受持筋の「地旅共」に助け合う。万一喜平次に偏意があればこの株を又七は取戻す事を記し、親族であるから証文を作製する必要はないが後年のためとある。

従って森田喜平次と上野又七は縁戚関係にある。譲渡の際に金子は動いていないだろう。⁽⁵⁵⁾そして近江屋、米屋は恐らく福岡の者で東海道通日雇御用の株は福岡のものではあるまいか。

ここで筑前国福岡五二万三三〇石福岡藩黒田家の関係時期について「黒田新統家譜」⁽⁵⁶⁾「黒田世譜」⁽⁵⁷⁾玉泉大梁編「福岡県史」⁽⁵⁸⁾により記すると、一〇代斉清は寛政七年生で同年一〇月六日に襲封し、天保五年一月六日致仕、同八年二月一日江戸に移り嘉永四年正月二六日に歿し、同年二月三日（二四カ）に喪を發した。天真寺に葬り乾竜院利山道見と追号している。

一一代長薄は文政五年二月養子許可、同一〇年九月二八日初入国、天保五年一月六日相統、明治二年に致仕である。

一二代長知は嘉永元年一月二一日養子、明治二年二月五日相統、同年六月一七日藩籍奉還により福岡藩知事に任

ぜられ、同四年七月二日免ぜられている。

つぎに万屋森田家について概略を記すると、文政一三年には喜八・喜平次とあり、天保八年八月に喜八は死亡している。便宜上つけるがこの初代喜平次は、文政年間に隠居して喜八と称したのであらう。二代喜平次は安政四年九月に歿しているが、嘉永三年九月に喜右衛門、同六年には喜右衛門を消して義七とあるから三代喜平次は恐らく相統以前には喜右衛門、義(儀)七と称している。彼は安政四年一〇月相統し明治三年三月には死亡が確認されるが亡父喜八とあるので晩年は隠居していたのだらう。共に年月は明らかでない。四代喜平次は明治三年五月には二一才で森田喜平次喜弘とみえている。彼は嘉永三年一二月の生れであらう。母琴は博多橋口町年行司次上・樋崎次吉の女子で嘉永四年三月喜右衛門に嫁し、同六年三月離別している。

明治二五年に福岡市大工町二九番地森田虎太郎は徴兵検査を受けている。彼が五代であらうか、明らかでない。

安政三辰年一二月付万屋喜平次「覚」は、二代喜平次が御用所の尋ねに対して勤めた御旅行御用御供を書上げたものである。文政二年見習から安政二年迄の三六年間で名代の場合も含めて万屋の福岡藩関係業務を示している。江戸御供十七度と記しているが、御参勤九、木曾路二、下国迎一、若殿参府・下国五、少将供二、御構女中出府・下国六、長崎御越座二以上となっている。合計は二七になる。それで万屋は相当な繁度で御用を勤めたと考えられる。⁽⁵⁹⁾これで江戸と長崎の御用に関係している事がわかる。

この御用に関連して万屋森田氏は格式、扶持、褒美が与えられている。概略をたどると、文政二年出精につき御沙汰、同一三年三月日雇支配炭屋又七、同喜八・万屋喜平次に若殿様下国に道中出精として御吸物御酒頂戴とある。同年夏御用金を万屋は仰付けられているが、これは郡中千貫目、両市中五百貫目の内で、金三五両を年内に上納している。

天保三年辰正月「郡町之者由来書」⁽⁶⁰⁾の格式町人として、御用聞町人格に、万屋喜八、万屋又平、炭屋又七がある。なお年行司次に永代として島井久左衛門がみえている。

同五年八月朔日に父喜八老年につき万屋喜平次は御用聞町人格を仰付けられた。天保五、六年には喜八が御救役所に米を上納している。

同八年九月に万屋喜平次は父死亡により地旅御用向を同様に仰付けられた。扶持は御法により召上げられたが、永納銀を納めて永代一人扶持を下置かれた。他は惣べて並び通りとある。ついで同一〇年春炭屋又七、万屋喜平治、万屋又治は御構女中出府通日雇入財を時節を考えて手内で処理し増銭を要求しなかったので御吸物御酒頂戴、同一一年一〇月に万屋喜平次は御急道中出精などで二人扶持を下された。弘化五年には金一五〇両を御町役所に出納している。

嘉永三年三月一四日には年行司格次として御町役所に江戸御屋敷敷類焼について御普請御用に御国元で日雇を召仕うとの事につき千人平日雇を寸志として差出す事を願出ている。

同五年と推測される二月二六日には万屋喜平次、万屋又平、炭屋又七は若殿(長知)御目見、元服につき御祝頂戴を仰付けられた。

同六年五月には日雇支配万屋喜平次は侍従様(長知)初入での御道中日雇方出精につき青銅一貫文頂戴を申付けられ、同七年閏七月には年来の御用向出精、道中筋功者、近年の長崎御越座での多人数の日雇寄せ方を理由に、これ迄の二人扶持を俸の代迄下され、米五俵頂戴した。

安政四年巳一〇月には万屋義七は父喜平次が九月病死により、父の勤めた地旅御用と諸口御用、及び永代二人扶持、俸代迄三人扶持、年行司格、それに日雇支配役を仰付けられた。同四年十一月二日には改名した万屋喜平次は

御用聞町人並に申付けられた。同五年二月二十八日には御用聞町人並万屋喜平次、他一名は御銀用出精し御用達方申談を理由に酒三斗、鰯貳こんを下されている。これは早速相当分を払わされたのではあるまいか。

万延二年正月には窮民救に米穀を差出し御料理頂戴とある。

文久元年五月一七日には年行司次上である事実がある。この日には急病流行につき人氣引立のため町方で宝満宮御祈禱に金二兩寸志を出して奇特の御沙汰をうけた。同元年六月には財用筋世話につき二人扶持を遣わされた。同年八月には同列申合せて抱大筒一五〇挺を五カ年割寸志により三合入盃を頂戴し、同二年戊四月には年番徳永専蔵、万屋喜平次宛の正金一五兩献上大筒製造請取がみえている。同二年五月には万屋喜平次は御用聞町人退役を願っているが差留められている事実がある。同三年には御台場御營築に夫根米、湯木屋雜用銀を申合せて差出し賞されている。

慶応元年七月二十八日には銀預証拠金六〇〇兩、永納(会所証拠金)金一〇〇兩を非常備金寸志に提出した年行司次森田喜平次は二人扶持を増して都合永代四人扶持となり、孫代迄年行司次上を申付けられた。ついで同四年六月二〇日には御用達森田喜平次は金五〇〇兩と米四二俵を献上し、永代一人扶持と苗字御免になった。

万延元年と推定の「福岡藩家中分限帳」⁽⁶¹⁾には二人扶持として万屋喜平次がみえている。

明治二年三月には御用聞町人中の一人として御銀用受持中二人扶持を下された。同三年と推測される午年二月には森田喜平次は先代通り年々二人扶持となった。これは四代だろう。同じく午年七月には年行司次上の森田喜平次は窮民救助米により呉呂服羽織地を下されている。同三年閏一〇月には司計局から銀台二歩判引揚に際して従来の「御請前高金札建替御受」申出を奇特として焼物御盃を下され同月教育曹に二歩判五兩を寸志として提出し、四年正月に賞盃を下されている。これら以外にも金穀の上納は多いが確認できない。

明治期に従来の扶持がどう計算されているかは明らかでない。またこれに関連して年不詳戊午十一月には万屋喜平

次は平日紙類商売をしているが、諸色高値に抱らず値下げを賞して青銅三〇〇文を下されている。日雇支配の外に紙類商にも従事している事が知られる。

明治二年巳五月には賛生館役所鑑札を福岡大工町万屋喜平次として請けている。薬味聞届によると玉竜丸、健児丹、如神丸の三種だが、従来からの営業かどうかは不明である。

同三年五月五日には家令事御納戸頭の配慮で知事黒田長知と若君兩人が御納戸頭以下の役人附添で森田喜平次宅に昼九ツ半時から八ツ半時迄出座になり、慰みに同人妹多満、万屋喜七娘於津、檜差屋卯八娘於佐喜の三人が三味線を引いた。翌日二一才の喜平次喜弘は記録に留め、その末尾に「右之通委細書記置候、永々目出度事ニ候間、記録亨管候事」と書いている。余程感激したのだろう。

この格式は藤本隆士「近世における特権商人の類型―福岡藩の場合」⁽⁶⁾によると、福岡、博多には天保三年に兩大賀、大賀次、年行司、年行司次、年行司格、御用聞町人格の順で、慶応三年には兩大賀、大賀並、大賀次、年行司次上々席、年行司次上席、年行司次、年行司格、年行司格次、御用町人の順である。人数は前者七一人、後者二九三人で急増の理由に藩財政の窮乏が推定されている。格式の内容は「絹の羽織を許されたり、諸願届書など年寄・年行司の奥書なしで町役所に提出できたり、宗旨改も年寄の改めをうけず、年始御礼や松原出が許され、藩主に慶事がある際に酒肴を頂戴したり、能の拝見を許されたり、罪を犯した場合も実刑を免かれるというような有形無形の特典がある。これが非常な榮譽とされ」たとある。従って業務とは余り関係がなさそうである。

六 通 日 雇

大坂川西組通日雇仲間

炭屋又 七

右者紐屋勘兵衛を譲受

万屋喜平次

右者政田屋惣右衛門を譲請

右之通相違無之候以上

元年行司

子十月

西田屋次左衛門^⑧

炭屋又 七殿

万屋喜平次殿

とあるが、これは万屋喜平次と日雇支配炭屋又七が大坂川西組日雇方仲間御免株の譲渡を請けた事を同組の元年行司が認めたものである。「五街道取締書物類寄拾六之帳」⁽⁶⁵⁾によると文政四年一二月には川西組に的屋町紐屋勘兵衛、京町堀四町目万屋七兵衛支配借屋政田屋惣右衛門とあり、嘉永七年「大阪両組通日雇仲間名鑑」⁽⁶⁶⁾には常安裏町炭屋又七、同町万屋喜平次とある。この間の子年は文政十一年、天保十一年の兩年であるが、譲受の交渉を記している二月一二日付万屋御親方、御衆中宛福田屋佐兵衛、内志津「御免札一件入用手紙」の内容からみて天保十一年と考えたい。

さて書状によると福田屋佐兵衛は前年冬大坂で万屋喜平次が参勤道中御用に際して会談しており、正月二八日には株札について播磨屋政蔵子息、他一人と福田屋は談合している。播磨屋の性格は明らかでない。その後で又治殿が入用の金は三両でよいと主張したのに対して福田屋は四両と考え、正月晦日にこの点で播磨屋と会談したが進展しな

ったため「私方は株札元々ニ御戻シ被下候様契約仕候」とあり、江戸から万屋喜平次が帰る途中大坂で再会して福田屋と交渉の際に又治殿と万屋が別々に到着して嘶がわからなくなると困るので、前もって両者で談合するように求めている事実がある。恐らく又治は福岡の万屋又治^次で日雇支配で縁者ではあるまいか。福田屋、播磨屋は通日雇には見当らない。推測の域を出ないが、大坂の人宿か、仲間以外の通日雇に従事している者ではあるまいか。

つぎに明治四年末一二月付御県庁中宛森田喜平次「乍恐奉願上口上覚」では「先年来旅日雇頭勤役中下々方ニ召仕候」大坂常安裏町播磨屋政吉⁶⁷卒新七が東京で矢富弥逸に召仕われ、帰県の際に召連れられた。御当県御藩印を所持しており、帰県の上は便船次第帰坂する予定で「是迄之通私方江寄宿仕」ったが、屈をしていなかったら病氣になり昨一六日死去し福岡大工町浄念寺に仮埋した事実を記している。播磨屋政吉は嘉永七年には大阪川西組通日雇仲間⁶⁷に属しており、ここに記るされている行動は一般の通日雇の業務である。従って「旅日雇」は前述の秀村選三氏の説明の他に通日雇と似た性格の場合も予想される。そして大坂では通日雇の仲間内で下請関係の存在が推測されよう。

また未三月付「奉申上口上之覚」に

一私共下方大坂中嶋常安町居住日雇方筑後屋吉五郎と申者 御参勤御上下并御家中様御登之節、御供申上居候者ニ御座候、右稼之為昨廿三日着仕申候間、止宿為仕申候、此段御届申上候

とある大坂の日雇方筑後屋吉五郎は万屋の下方として、福岡藩の参勤道中と家中の旅行に供をし、業務のため福岡にきて万屋に止宿している。嘉永七年には川西組に常安裏町筑後屋又次郎がみえているが、⁶⁸関係は明らかでない。少なくとも大坂の日雇方が下方として福岡と連絡がある事実は、若し万屋が大坂川西組通日雇仲間株を持っていなくても矢張り連絡が行なわれた事を予想させる。

それは嘉永四年と推測される三月一七日付万屋喜平次宛、津嶋屋弥太郎、津嶋屋弥平書状によると、去冬津嶋屋は

福岡に赴き御馳走され、旅宿に万屋がたづね、二月五日に津嶋屋は帰宅したが、大殿様（一〇代齊清、正月二八日歿）御不例により、御飛脚の往来があり家中も登るので多忙で挨拶が遅くたと断っている。

津島屋は伏見通日雇で福岡藩出入であり、万延元年の「福岡藩家中分限帳」⁽⁶⁹⁾には一四人扶持で伏見の津島屋弥平とみえている。

伏見通日雇については文政四年「覚書」、正月一八日付森田喜平次宛、丹後屋新吉、□□屋□兵衛、津国屋太郎兵衛、津国屋次兵衛、牧方屋伊兵衛書状によると、文政四年三月に万屋喜平次が仲人になって、津島屋甚吉と五軒家、即ち牧方屋伊兵衛、津国屋次兵衛、津国屋長蔵、牧方屋八兵衛、丹後屋新吉が一札を相互に取替しているが、「五街道取締書物類寄拾六之帳」⁽⁷¹⁾によると、文政四年伏見通日雇仲間には上南部町津国屋太郎兵衛、南組塩屋町丹後屋新吉、同町牧方屋八兵衛、上南部町津国屋次兵衛、南組鐘木町牧方屋伊兵衛とある。従って津国屋長蔵も恐らく伏見通日雇ではあるまいか。津島屋甚吉は少なくとも江戸の者ではない事が確認されている。

事は同年福岡藩御帰路通日用御用に際して他の日雇頭と詮議する時間もない事を理由に万屋が従事する事になったが、その中国路御用下方請持を津島屋甚吉が五軒家でなく播州の鶴伝吉を万屋に断りなく江戸御屋敷に申告した。

津島屋と五軒家は筑州様御道中通人馬御用の下方引請を相互に先祖から勤めた間柄であるが、去秋御用に際して前借銀の処理をめぐって両者の意志が通せず、又御屋敷に事実を津島屋が報告しなかったので五軒家の立場がなくなり、仕事からはなれると大勢の手先を抱えて困る五軒家が万屋をたよった訳である。結局妥協が成立し五軒家が請負い両者今後の協調を誓っている。万屋は津嶋屋は先々代からの懸意である事を述べているので、恐らく伏見通日雇との関係もこの時期からであろう。

つぎに江戸については嘉永元年四月に「肥前様御下国之節中国路人馬賃銭増何程と聞合被仰付候間喜平次下関行」

によると、佐賀藩の中国路人馬増賃銭調査を仰付けられた万屋喜平次は、佐賀藩日雇頭米屋清六は「私下方之者ニ御座候ニ付」大里迄呼寄せて極く内密に聞いている。嘉永六年四月「江戸六組飛脚屋仲間」によると、京橋組弓町鍛次郎店米屋清六とある。

これら各地の通日雇仲間との関係からすれば、大坂川西組通日雇仲間株札を入手する事は不自然な事ではない。また各地の万屋の様な城下町日雇頭、同支配は江戸、伏見、大坂の通日雇仲間と何んらかの連絡をもっていたと推測されよう。

なお「福岡藩家中分限帳」には、二人扶持として津島屋藤藏⁽⁷³⁾がある。彼は嘉永七年には大坂川西組通日雇で西信町⁽⁷⁴⁾にいる。つぎに江戸に二人扶持として山形屋喜兵衛⁽⁷⁵⁾がある。喜兵衛は「諸問屋名前帳」⁽⁷⁶⁾によると、人宿三番組で麻布谷町家持で安政六年三月に上総屋と改号している。この両者と万屋が関係があったかは明らかでない。

七 参勤・長崎御越座

「五街道取締書物類寄拾二之帳」⁽⁷⁷⁾には、文政四年取締のため五街道通行の大名訳書として東海道旅行の分に、二月、高五拾貳万石筑前福岡松平備前守(黒田)。四月、高五万石筑前秋月黒田甲斐守とある。

そして「七之帳」⁽⁷⁸⁾には文政五年四月評決「諸家旅行ニ付人馬遣高問合之節心得書」に

東海道

式拾万石以上

当日并前後一日宛都合三日、五拾人・五拾疋宛

但、前後之儀は不隔日候ハ、勝手次第之事

松平備前守、松平肥前守は御用も有之候ニ付、当日百人・百疋、前後兩日五拾人・五拾疋宛

但、前同断

とあり、次に拾万石以上の規定があるが、五万石については記載がない。前記の松平備前守は福岡藩主黒田氏、松平肥前守は佐賀藩主鍋島氏であり、御用とは長崎警備⁽⁸⁹⁾を示している。「同八之帳」⁽⁸⁰⁾に文政八年十二月紀伊殿御城附問合に対する挨拶には、諸大名東海道旅行一日の御定人馬繼立高は人足五〇人、馬五〇疋とあるから、秋月藩の場合もこれによつたらう。この御定人馬以外は手人馬、通し日雇、稼人馬によつて補充される⁽⁸¹⁾。

さて弘化三年頃と推測される上野勝從「存寄書」⁽⁸²⁾には福岡藩の参勤交代について

一、江戸御参勤御供高凡上下三百人余、三十六御泊座に積り、御往来御立銀三万兩余

御供面之旅苦勞銀御渡し斗に而は旅用不足故、御勘定活押拝借、或は町人より相對に借入相償候、貸方町人は諸士返済之末を計り、一兩年に而三、四年之利息にも廻る様に仕かけ候故、諸士は元利返済之末、貧乏仕候儀も御座候、長崎諸方も同様候^(下略)

と記るし、惣勢三百人余であり、御立銀三万兩余を要するとしている。この内での万屋等の費用については知る事が出来ない。御供の家中が江戸、長崎、諸方共に借金で苦慮する事を述べている。江戸の他に長崎があるのは福岡藩が長崎の藩鎮であつたからである。

江戸については既に記してきたが、天保五年以降と推測される午年五月付炭屋又七、万屋喜平次、万屋又次宛「申渡」には「御参勤御往来御国中間并御帰路東海道通日雇御用」を三人に申付けが、賃銀は一昨辰年に又七に達し請書が出ているものによるが、今回御建銀を減ずる事にしたので引方を申出る様に命じたが、兩万屋は申出したが、炭屋はないので除く可きであるが一昨年来賃銀を減じている事を考慮して三人にした。従つてなお引方仕法を立

てるべきであり、申出によつては詮議もある事をほのめかしている。

これは藩と日雇支配とで賃銀について相当交渉のあった事を示している。

つぎに家中の場合については、文政十一年から天保八年の間と推定される一三日付喜平次宛書状によると、差出人は福岡の喜八と推測するが林様中国路御用請負を曲折の未だ万屋が請負い、道中用心金上納を問題にしているが、帰りの時の仕事を道中で願う事になっている。矢張り競争があった。林様が嘉永四年御役人名元^④写にみえる御用人林太郎右衛門かは確認していない。

長崎の場合には、弘化四年写「長崎異船渡来之節陸路被差越増御人数渡人馬根帳之写」に、御家老以下四〇の職名があり、その内には日雇支配之者人馬才料共がみえている。記載されている人足、馬の合計は、人足六〇四人、馬二〇二疋である。これが長崎御越座の通常かは確認していない。

嘉永元年六月一六日写「長崎水之節役々差出日雇之事」には、通日雇三六人が仰付けられ内訳は御家老に通日雇一人、御用人に七人、大頭に七人、御用聞に四人、御聞役に六人である。そして三六人の内で四人は案内舁に召仕うので賃銀が増した分は「自分と相仕舞」う旨を申出ている。

つぎに人足一〇〇人、馬五〇疋があり、御家老御用人聞役付御右筆三人、飛脚足輕十人、石火矢役十六人、大頭手付共御用聞共として陸路指越の人馬賃渡が渡される。そして石火矢打足輕十七人が現人足を召仕うので本文の外に増人数となるとあり、結局四六人であるが、これは人足一〇〇人、馬五〇疋以外の増であろうか。合計を人足一五六人、馬四〇疋としている。この計算を確認していない。

馬が一〇疋減じたのを人足二〇人不足分に振替えて次の通り人足不足とする。即ち往来一〇日分賃銀高として平日雇三六人賃銀一貫九一八匁八分、右病人代平日雇七人賃銀三七三匁一分、小指三人賃銀二六五匁二分、合計銀二貫五

五七匁一分としている。

この賃銀高で不足分とは平日雇七人、小指三人の賃銀に当るのか、平日雇賃銀による人足、馬の実際の傭雇数はどうなっているのか、これらについては現在の私にはわからない。

嘉永二年酉三月「長崎表白帆到着非常之事」は、米船到来を長崎から宿継大早で通知があり人数差立になった際のものであるが、平日雇四九人、小差七人を必要としている。日雇支配中の通人足賃銀証拠は第二四表の通りで合計銀

	人数	賃銀	銀匁	1人宛銀
平日雇	49	2,611.70		53.30
小差	6	530.40		88.40
御先触持	1	117.00		117.00
合計	56	3,259.10		—

第24表 嘉永2年長崎非常通人足賃銀表

	丁錢文	金兩分朱
平日雇 49 人	200,000	
作藏他 4 人給金		6-0-0
御側筒歩行賃錢渡		3-0
平日雇 1 人	5,000	
駈附日雇 13 人	4,680	
同あふれ 3 人	300	
山田他供附給金		4-0-0
日雇 2 人	400	
魚屋払他	150斗	
合計	210,530	10-3-0

第25表 嘉永2年長崎非常通人足賃銀下方渡表

三貫二五九匁一分は、金五〇兩と丁錢九一〇文であり、御勘定所から差紙で御銀倉から受取っている。

実際の使用と考えられる下方渡は第二五表の通りで金一〇兩三分、丁錢二一〇貫五三〇文である。そして平日雇五〇人、駈附日雇一六人、日雇二人、給金五人がみえているから矢張り通日雇の賃銀高人数と使用日雇人数とは合致していない。この点が日雇支配にとって損徳の程は不明である。

長崎の場合の請負証文は福岡藩についてはみていないが、秋月藩について天保一〇年「秋月様長崎御代番御用之事」がある。同年には万屋喜平次は福岡藩御参勤御供のため、名代として喜七が勤めている。

天保一〇年亥一〇月付清田領内、森精兵衛宛日雇支配喜平次代喜七、同忠五郎「乍恐奉願上口上之覚」では、以前に長崎御越座の際親共が仰付けられ、文化六年御用を継続して勤めた。今回の長崎御越座は福岡藩同様に出精している。

そして同年月清田領内、森精兵衛宛万屋喜平次代喜七、綿屋忠五郎「今般長崎御越座御用被召仕候通日雇賃銀一切御請負申上根証文之事」による賃銀は第二六表の通りである。次に他の各項について記するすと、

1 御駕籠日雇一〇人、御召替日雇四人については看板、合羽、脚半、日笠、手掛を貸渡される。

2 上日雇については、御家中様渡り分の旅飯支払の場合には銀一匁三分宛引く事。

3 日雇支配料貫目持六貫目持、高一五人に立夫一人宛を下される。その立夫賃銀は平均して上日雇賃銀に当る五匁宛渡をきめる事。

4 貫目御荷物は一六貫目持である。

5 小指の者の賃銀は上日雇並である。

6 御夜込、御早立、御行越、御廻り道、御泊り違等の時は、一里一人につき銀八分五厘宛渡しとする。但し御早立、御夜込は御挑灯引け限りの時限で計算する。又御往來の内で二度迄は先年の通り賃銀を頂戴しない。

7 惣日雇は秋月御免駕前々日に福岡から入込むので二日、御帰城後福岡引取りに一日、合計三分は先年通り銀三匁五分宛である。この内で小指の者は銀四匁宛を渡される。

		1日1人	賃銀
御駕籠	日雇	14.80	
御召替	日雇	6.00	
御家老様御中	日雇	5.00	
御家老様御中	日雇	4.30	
御家老様御中	日雇	5.00	

第26表 天保10年秋月藩長崎御越座賃銀表

8 人足と本馬二疋を駕籠の者の髪道具、着替附渡としてこの賃金を渡される事。

9 御駕籠日雇は長崎御勤の際には先年通り一度半役宛を渡される。

10 御国内現人足請取高賃金を上納する事。

11 御寝間長持一棹の並し貫目は三五貫目で、御台所長持一棹は三三貫八九〇目である。兩者共に多少の輕重は異儀なく勤めるが、格別の目方で下方が難渋の場合には重さを改める。

12 惣日雇の看板、合羽、笠、脚半の類は一式を貸渡される事。

13 金相場両替は一両につき銀六〇目替で渡される事。

以上で現地出張日数の7以外は福岡藩の場合にも恐らく同様であったと考えたい。

長崎ではないが便宜上ここに記るすと、福岡藩領海に黒船が漂着した場合にも日雇をさし出す事になっている。大島は玄界灘と響灘にはさまれた島であるが、弘化四末年「大嶋漂流舟漂着之事」の未一月付御鎗方宛日雇支配七郎次郎、和多藏、忠五郎、喜平次「奉申上口上之覚」では、駈付けた小使日雇一五人の内で四人程が仕われた。従来は実働人数に抱わらず一五人高三人役の賃金が渡されたが、今回は結局四人が昼夜小使二人役で残り一人は一人役宛とされた。その結果一九人昼夜小使二四六文宛で賃丁錢四貫六七四文、従って金二步二朱と丁錢四二四文が支給されている。

同年月「御鎗方々書付之覚」では、以来漁舟漂着の場合は日雇召連れに及ばず、人操が必要な場合には申付ける。その賃金は漁舟漂着など穩かな場合には日雇賃金は平日通りである。

なお「福岡藩家中分限帳」には、日雇支配忠五郎は二人扶持、戌亥屋和多藏も二人扶持とあり、⁽⁸⁵⁾万屋又次は三人扶持とある。⁽⁸⁶⁾恐らく日雇支配は扶持と関係があるであろう。

八 巡 見 使

天保九年福岡藩を巡視した巡見使は「許山文書」⁽⁸⁷⁾によると、御使番二千石曾我又左衛門、西丸様御小姓組千二百石大久保勘三郎、御書院御番組千四十三石近藤勘七郎の三人である。

「慎徳院殿御実紀」巻二には、天保九年三月一日に「使番平岩七之助。曾我又左衛門。黒田五左衛門。西城小姓組片桐靱負。右大將殿小姓組大久保勘三郎。中根伝七郎。西城書院番三枝平左衛門。右大將殿書院番近藤勘七郎。岡田左近は諸国巡視の事命ぜられ。いとま下さる」⁽⁸⁸⁾とあり、ついで同年一〇月朔日には「使番曾我又左衛門。右大將殿小姓組大久保勘三郎。同じ書院番近藤勘七郎巡視はてゝ帰り謁す」⁽⁸⁹⁾とある。従つて四月から九月にかけて半年に及ぶ巡視である。

この巡見使通行については嘉永六年七月凡例、荒井頭道纂「牧民金鑑」巻三の天保八酉年十二月二十九日付「申渡書付」⁽⁹⁰⁾には

一 右之面々

御朱印並御証文員数之外、人馬入候ハ、其所定メ之駄賃有之者其定之通、定無之所者近辺御定之割合を以、駄賃銭取之人馬可出事

御朱印並御証文之外、賃なし之人馬老人老足も不可出之事
と人馬使用を規定されている。

さて福岡藩では天保九年三月付御用所下書受持伊藤東助、御鎗方小頭受持石井作平宛日雇支配四人「奉申上口上之覚」では、御巡見使下向御用に召仕う日雇御用を仰付けられた日雇支配は寛政元年の際に勤めた賃銀、即ち御駕籠日

雇一人一日銀四匁二分宛、御供日雇同銀三匁八分宛で、兩者共に夜半役宛では現在は雇立は出来ないとして、これに五割増を願っている。

	下り人	登り人	合計人
駕籠	403.0	540	943.0
小指	132.0	180	312.0
平(供)	871.5	1085	1956.5
合計	1046.5	1805	2211.5

第 27 表 天保 9 年巡見使御用日雇人数表

	下り銀	登り銀	合計銀	1人当銀
駕籠	2,538.90	3,402.00	5,940.90	6.30
小指	831.60	1,134.00	1,965.60	6.30
平(供)	4,967.50	6,754.50	11,722.00	5.70
合計	8,338.0	12,529.50	20,867.50	
内前借銀	4,000.0	3,000.00	7,000.00	
残り	4,338.0	9,529.50	13,867.50	

第 28 表 天保 9 年巡見使御用日雇賃銀表

ところで巡見使一行としては必要な日雇として、駕籠日雇一八人は六枚物三挺のためであり、供日雇二五人の内訳は御具足九人(一頭三人宛)、御扶箱九人(三人宛)、御茶弁当六人(二人宛)、御道具助一人(曾我又左衛門分)である。次に御附添御医師のための日雇五人の内訳は御打物持三人、御薬箱二人であり、彼等の賃銀は供日雇同前である。合計四八人が必要である。

彼等について、駕籠日雇の看板は藩の御鎗方から渡されるが、その他の平日雇の看板は損料のものによる。合羽と日笠は駕籠、平日雇共に渡される。その他に人足持の分として看板一六枚、赤合羽一六枚損料の言付があった。なお駕籠看板は寛政元年には手元から納めたが、今回は万屋又次に仰付けられる様に願っている。

惣日雇分昼食等の持人がないから御鎗方に合羽籠一荷、竹馬一荷の人足を願出ている。その他に宿は八軒であり、これ

は下旅籠で一五〇文宛に定める。本馬は二疋としている。

これらの条件で、四月付御鎗方御役所宛日雇支配四人「奉願上口上之覚」では下向の時期が近づいたとして惣日雇手当のため前借を願ひ四月一日に正銀が渡された。

道具名	掛り人数	若松送り	芦屋送り
膳味 棚桶	1組ニ 1人	6組 6人	6組 6人
噌櫃	1挺ニ 2	3挺 6	9挺 18
酢醬油	1ツニ 2	20個 40	
野菜類	1荷 2	6荷 12	24荷 48
七嶋包桶類	1 1	30 30	
長持	1ツ 2	13個 26	7個 14
大真那板	1棹 6	12棹 72	10棹 60
七輪摺鉢	2面 1	7面 3.5	3面 1.5
鍋釜類	1荷 2	7荷 14	3荷 6
賄長持	1 2	10 20	
御夜具長持	1棹 6	1棹 6	
	1 4	23 92	23棹 92
人数合計		327.5人	247.5人

第29表 天保9年巡見使入用品送表(A)

即ち「今般御巡見様御用御領中御供被召仕候日雇賃銀請取申上事」として、日雇二二一人五歩の内訳は第二七表の通り、賃銀二〇貫八六七匁五分の内訳は第二八表の通りである。前借銀は銀七貫目で、残額は銀一三貫八六七匁五分である。残額の内で下り分は金六二兩二歩、錢七三七文、半銀七匁三分五厘、登り分は金一五四兩三歩二朱、丁錢四七〇文となる。

日雇の他に看板一〇二九枚損料は一枚銀一匁であるから銀一貫〇二九匁、合羽五二五枚損料は一枚銀三分で銀一五七匁五分、合計銀一貫一八六匁五分を要する。従って日雇賃銀と損料で銀二二貫〇五四匁を要し、他に秋月領分も頼まれたので証拠銀五百目余と推測しているが控がないので正確な数字は不明である。式人役とあるが、巡見使が二人なのかどうかは明らかでない。

つぎに同年四月付御郡御役所宛日雇支配四人「御巡見使違御入用諸品持送私とも江請負被仰付候分、日雇賃銀受取申上事」では、若松送り、芦屋送りは第二九表の通りになる。

若松送りは夫数三二七人五歩であり、道法は福岡―若松―姪浜―福岡の三七里で一里一人賃銀一匁宛で、(A)銀一三貫

七六六匁である。芦屋送りは夫数二四七人五歩で、御夜具長持以外は福岡―芦屋―姪浜―福岡の二七里で賃錢四貫一四四匁五分、御夜具長持は福岡―芦屋―福岡の二四里で賃錢二貫二〇八匁、合計(B)錢六貫三五二匁五分である。

付廻しとして御用心駕籠四人が福岡―若松―深江―福岡の四八里で賃錢一九二匁、安駄人足二〇人が芦屋―深江―福岡の一九里で賃錢五二〇匁、撰人足一〇人が芦屋―深江―福岡の二六里で賃錢一九〇匁、合計夫数三四人、(C)賃錢九〇二匁である。そしてこの分は銀立とある。なお一里一人錢一匁の賃錢であり、深江は中津藩領である。

道具名	掛り人数	数	夫
挑灯掛台付	1.5個	24個	人16
薄縁	12枚	36枚	3
引戸案駄	1挺	3挺	9
荷覆七嶋表	20枚	120枚	6
杉手水桶、同手田子	1荷	1荷	1
塔*手	3本	6本	2
御幕	5張	10張	2
烏毛鎗	3.3本	10本	3
嚙道具	3	6	2
寄棟	4	8	2
長持	1棹	1棹	6
駕籠蒲団7個	}	2個	2
桐油7			
赤合羽6			
竹皮笠6			
箱桃灯8			
人数合計			54人

第30表 天保9年巡見使品送表(B)

このAとCの惣夫数六〇七人の足留二日分が

(D)錢六貫〇七〇目である。これは隔宿送りに御品を持運ぶが、若松、芦屋共に到着日に人夫を寄せておいたが翌日迄滞座になったので足留錢一日一人錢五匁として計算されている。

つぎに若松、芦屋両所御入用分を芦屋迄持送りの内訳は第三〇表の通りであり、夫数五四人で福岡―芦屋の一二里で(D)賃錢六四八匁になる。そしてこの五四人が芦屋迄届けた帰路福岡迄を六歩役として下されるから、夫数三二人四歩、(E)賃錢三八八匁八分となる。

最後に巡見使一行の日用品と考えられる風呂桶等第三一表の品物を二六人で、若松送りとし

て福岡―若松の一七里で(G)賃錢四四二匁、芦屋送りは福岡―芦屋の一二里で(H)賃錢三一二匁、赤間送りは福岡―赤間の九里で(I)賃錢二三四匁、青柳送りは福岡―青柳の五里で(J)賃錢一三〇目、姪浜送りは福岡―姪浜の一・五里で(K)賃錢三九匁である。

道 具	掛り人数		個 夫	
	個	人	個	人
風 呂 桶	1	4	3	12
大 行 盃	1	1	3	3
手水盃・手桶	3	1	3	1
湯桶・水桶・焼物入組	3	1	6	2
御 踏 物 類	2	1	6	3
薄 手 水 桶	1 荷	1	1 荷	1
	5 枚	1	15 枚	3
	6 個	1	6 個	1
人 数 合 計				26人

第 31 表 天保 9 年巡見使品送表 (C)

G~Kの五宿についての品物荷作り日雇賃、繩蒔竹棟代、持送り日雇の若松、芦屋からの帰路飯代共に(I)錢二一〇匁である。

A~Lの内で付廻夫賃銀の(C)正銀九〇二匁は金一三兩三步二朱、半銀一分二厘、その他のA~B、D~Lは正銀二八貫五九二匁三分で、これは金二五〇兩三步、半銀六匁一分となる。惣計金二六四兩二步二朱、錢三七八文を要し、内一八五兩は五〇兩福岡請、七五兩若松請、六〇兩姪浜請で渡される。残額金七九兩二步二朱、錢三七八文を四月に請取っている。

この金額は御町役所から請取り、前記日雇、看板等損料は御鎗方役所からである。従って両者を合算したものが日雇支配の受取惣額ではあるまいか。なおこの点については研究したい。

この請負を日雇支配では「御巡見使之節郡夫請之事」として、郡夫請と意識している。

九 廻浦巡見使

天保二二年五月二日付「申達」⁽⁹⁾には、

此度東海道筋より西国筋迄廻浦為御用、御勘定出役高橋平作、御勘定吟味方改役並竹内清太郎、并御普請役之者相添被差遣候付、御領分海岸附村方之者共呼出、船数其外相尋、品に寄家来中へも及懸合候儀も可有之候間、差支無之様可被取計候

右之趣内藤隼人正申渡之

御出席

勘定奉行

御勘定奉行組頭

御勘定

内藤隼人正殿（矩佳）

羽田竜助殿

佐藤伝之丞殿

とある。即ち御勘定衆兩人、御普請役兩人が東海道から西国筋迄廻浦巡視したのである。福岡藩には同年一〇月に高橋平作、竹内清太郎、柴田歳平（采兵衛）、石川周蔵の四名が公領から「前原」―島田―久家―「岐志」―野北―宮浦―浜崎―今宿―姪浜―「博多」―箱崎―松崎―香椎―新宮―福岡―「津屋崎」―勝浦―田野村―鏡崎―波津―黒山村―「芦屋」―柏原―有毛―脇浦―「若松」の道巡で通行した。「」は泊りを示す。

これに先立ち同年九月二三日付御浦御役所宛日雇支配四人「乍恐奉願口上之覚」によると、廻浦御役人の御入用御物荷送り夫を日雇支配に夫請を願出ており、天保九年巡見使の「御用之継人足一体」受請を実績として申出ている。

同日付別紙では日雇賃金は巡見使の場合と同様で、撰人足とは御供付御荷物持等に召仕う者であり、人足とは御入用諸御道具類持送り夫等に召仕う者である。両者共に夫掛けは御荷物次第で、賃金は一里一人につき前者が銀一匁、後者が銭一匁である。

願は許可され御鎗方からの言附として陸尺二〇人、小指、その他に供付人足入用の看板、合羽、日笠は損借により

浦役所引付で、員数等は浦役所から申付ける事になっている。両役所の関係を確認していない。

これに対して陸尺看板、合羽は損料借と仰付けられても所持がないと申出た結果、御鎗方から御勘定衆兩人陸尺六人宛、御普請役兩人陸尺四人宛、合計駕籠の者二〇人、及び小差の者は二人とされ

御夜具御長	道具	人
賄方諸道具入組御長持	4 棹	16
飯 台	5	30
善 棚	3 釣	12
櫃	5 脚	10
目 籠	6 釣	12
両 掛	9 荷	13.5
	2	4

第33表 天保12年廻浦巡見使賄方道具持送夫表

役人名	駕籠	具足	両掛	合羽籠	合計
	挺通日雇	荷夫	荷夫	荷夫	
高橋平作	1 6人	1 2人	1 2人	2 4人	14人
竹内清太郎	1 6	1 2	2 1	1 2	12
柴田歳平	1 4		1 2		6
石川周蔵	1 4		1 2		6
合計	4 20人	2 4人	4 8人	3 6人	38人

第34表 天保12年廻浦公役人荷物人数表

た。平日雇の看板、合羽、日笠は損料借手当を支給する。その際に合羽の有合は関係なしでの計算である。駕籠の看板、合羽は御買物所から支給と申渡された。

賄方諸道具持送り夫の内訳は第三二表の通りで合計夫八一人五歩である。彼等については泊数五日泊り迄は里数賃錢で請負い、それ以上泊数が増した場合は一日一人につき錢四匁宛にするよう願っている。

公役人荷物人数は第三三表に示した通日雇（陸尺）二〇人、平荷九荷夫請の夫一八人の他に御長持二棹、夫一六人があり、夫請合計三四人については一里一人につき一分を引いて銀九分宛とする。

以上の条件に基いて御鎗方前借分銀一貫目、浦役所前借分金八両が渡されている。

さてこの郡夫請けとして、日雇支配喜平次、忠

五郎、和多蔵は惣日雇をつれて一〇月三日に福岡を出立して前原に行くので居滞留同様、四日は前原に居滞留、五日は勤日で博多泊り、六日は博多に居滞留、七日は勤日で山家泊り、八日は勤日で関迄赴き、廻浦役人は日田御領に入り、惣日雇は引返して久喜宮泊り、九日は帰途宰府泊り、一〇日帰宅であり、九・一〇日は居滞留同様にされる。従

って勤日三日、居滞留五日となる。

陸尺は勤日一日四〇〇文宛、平日三〇〇文宛で六枚物二挺二人、四枚物二挺八人である。平日雇は勤日一日三六〇文宛、居滞留二四〇文の計算とされている。

さて「廻浦中附廻り被召仕候通日雇御鎗方証拠之覚」は第三四表の通りである。合計銀二貫三一九匁六分は一〇月三日から一〇日迄の日数八日分についてであり、これは宛名はないが御鎗方関係であろう。

つぎに御浦役所宛日雇支配四人の「御廻浦公役人御通行ニ付御雇夫賃銀之覚」は付廻りで、前原から日田領関迄の里数は箱崎迄一里を見込んで二〇里二二丁で、一人一里銀九分宛として撰人足三四人の賃銀六一二匁である。これは金九兩二歩三朱、半銀一分六厘に当る。つまり勤日分である。

この他に前後四日と博多居滞留一日、合計五日分の居滞留分は一日一人二四〇文宛であるから丁錢四〇貫八〇〇文で、これは金六兩に当る。兩者合計金一五兩二歩三朱、錢一六文を要している。

従って廻浦巡見使については通日雇、小指、損料は御鎗方、夫請は浦役所の二本建の請負である。ここでも郡夫請

項 目	数	賃 銀	1人枚当
			銀 匁宛 昼夜ニ付
惣 雇 日 雇	20人	銀 1,512.00	9.45
小 指 之 損 料	3	216.80	9.45
看 板 損 料	34枚	272.00	1.00
日 笠 損 料	57	91.20	0.20
陸尺・平・小指共 合羽損料	34	26.20	0.80
賃 銀 合 計	—	2,319.60	—

第 32 表 天保 12 年廻浦公役人通日雇御鎗方証拠表

とみえる事が注目される。

一〇 長崎奉行

「五街道取締書物類寄拾九之帳」⁽⁹²⁾には、文政六末年八月代官大貫次右衛門伺に対する差図として、東海道旅行では長崎奉行旅行之節、当日百人・百疋之外、前後之内貳拾五人・貳拾五疋之上江猶貳拾五人・貳拾五疋を加、五拾人・五拾疋人馬打込遣ひ之分は御定賃錢受取可繼立筋ニ候条、右之心得を以可取計旨、石川主水正及差図候事とあり、同年九月代官平岩右膳への達では中山道では当日五〇人、五〇疋打込遣いで、前、後日の内定式遣ひ一三人、一三疋の上に猶一二人、一二疋を加えて二五人、二五疋人馬打込遣ひ之分は御定賃錢による繼立とある。

つぎに「同六之帳」⁽⁹⁴⁾には、文政七申年七月長崎奉行高橋越前守問合に、長崎奉行道中往返で赴任の際には人数荷物も少ないので御定人馬以外の使用は格別の事はないが、帰府旅行に際しては人数荷物が多い上に、表・内献上物、進物に人数がかかる。更に日が短かくて寒気の折を長途の旅行で病人、足痛があり、臨時格別の雇上げが必要であるが、相対雇賃錢が宿々で一定していない事を訴えたのに對する挨拶には、

長崎奉行其外御用ニ付往返之面々通行之節、御定之外、相対雇ニ相成候人馬賃錢請取方之儀、宿々ニ寄区之趣相聞候間、以来は右向々ニ限御定賃錢江三割程相増請取候儀と相心得、右々余計ニ賃錢請取候儀は勿論、宿々区ニ不相成、旅行之差支等無之様可致、尤先宿々江も可申通段申渡、証文申付候事とある。これらの規定が長崎街道の場合にどうであつたかは確認していない。

「慎徳院殿御実紀」⁽⁹⁵⁾卷五天保一二年四月二八日には「柳生伊勢守は長崎奉行となる」とある。この柳生伊勢守の長崎下向を考えて、六宿郡夫請負願書が提出されている。即ち天保一二年六月付御郡御役所宛日雇支配戌亥屋和多蔵、

綿屋忠五郎、万屋喜平次、炭屋又七「乍恐奉願上口上之覚」によると、日雇支配は御参勤、長崎御越座、地日雇を請負ってきた。福岡藩内通行の長崎奉行、公儀御役人、諸国御大名、諸国御藩中は宿々で「御入用之人足御郡夫ニ而御

継立ニ相成候旨」を承知している。その内でも近年は長崎奉行通行には御先触より余分の人足が遣われて御入財が多く出される由である。

そこで長崎奉行通行の継人足、菓子料等を日雇支配請負とすれば、御府内日雇頭の内に福岡藩参勤御用に従事し、且つ長崎奉行御用にも従った者がいるので不都合のない様に請負う事ができる。

この外に「御領内六宿内筋共」に御通行の大名、公儀役人、諸国藩中、阿蘭陀人の通行も含めて御先触人数四〇人以上の場合には、人足一人一里につき銀一匁宛、継馬一疋一里につき銀二匁一分宛で請負う。なお駅々では御先触人数二割丈けは御郡夫を寄せて貰いたい。これは御同勢の内で病人等が出た場合の用心としてである。

若しこの条件で請負う事が出来れば、手馴れた人足を雇うから、従来の御寄方御夫高より人数が減じ御郡益になる筈である。また諸家様御荷物才料、小指之者は是れ迄に日雇支配四人の下で御用に召仕った者も多いから業務に支障は起らない考えなので当年御通衆御入用人足継立を試みとして仰付けられる様に願っている。ここでは才料、小指之者が出入を固定せず流れ歩いている事が知られる。

第 35 表 天保 12 年長崎奉行人馬等請負債表

項 目	下向	賃銀	登り	賃銀	1人・正当
		銀 匁		銀 匁	銀匁宛
人 足	500人	10,000.00	750人	15,000.00	20.00
馬	200疋	8,400.00	300疋	12,600.00	42.00
御菓子料		5,400.00		5,400.00	
合 計		23,800.00		33,000.00	

請負見積は第三五表の通りで、御国端の黒崎駅から田代駅迄の請負を示し、御菓子料は御同勢へ仕向けるものである。下向が銀二三貫八〇〇目、登りが銀三三貫目であり、人足は五〇〇人と七五〇人に及んでいる。

賃銀については「先方払賃銀御往来分銀、御通路度々御役元江相納候事」と但書があるが、現在の所賃銀との関係はわからない。

結局往来で賃銀は合計銀五六貫八〇〇目である。人足は請負積人数の外に五〇人を駅々で寄方仰付を願っている。

これは同勢中の病人や「挑灯持之外用意仕」る者で、賃金は御高札前の額で日雇支配の方から納める。従ってこれは前記御先触人足の二割とあるものに当るのではないだろうか。とすれば御先触人足は二五〇人である。請負積人数との御先触人数との関係はなお研究する事にしたい。

請負願の結果は明らかでない。

一一 御 出 会

福岡藩では領内の筑前六宿を通行する長崎奉行に藩主か名代が出向いて挨拶するのが通例のようである。長崎奉行ではないが、嘉永六年に露国使節と応接のため大目付と共に長崎に赴いた勘定奉行川路左衛門尉聖謨は長崎奉行の准例により遇せられているので、彼の日記によりその模様を伺いたい。一二月四日は小倉を出発して木屋之瀬で昼休み、飯塚で泊っている。同日に小倉から一里半の大蔵村で福岡藩領に入る。即ち筑前である。ここに黒田美濃守齊博の家来三人が出迎える。一人は領境の規定、一人は附け回り、一人は藩主が美濃守が本日昼休みの木屋之瀬にきており「公儀御機嫌も奉伺度。且對話いたし度と之事」を申上げるためである。委細を察知し、藩主が当月朔日から遊獵を兼ねて茶屋で待っており、松平肥前守は「旅宿へ彼方参」っている由を聞き、手続を打合せている。

「御勘定奉行長崎御用として参候は。近頃ハ初而之事故。例も無之候ニ付。長崎奉行之准例を用ひ可申。大国へ対し。不敬無之様いたし度旨申遣」した。そこで聖謨は麻上下に着替え、家来はもも引、用人は野袴で赴き、門内には

陸尺の足を片足入れない様にして下乗し、御朱印は用人の首にかけて召連れる。黒田家の用人と挨拶して、玄関で刀持に刀を渡して次の間に入る。藩の家来が麻上下で夥敷く平伏している所に美濃守が出迎て挨拶し、その案内で座敷に通る。

聖謨が床の間に後に着座すると、美濃守が「上様益御機嫌克」と申上げ「御機嫌宜候旨」を答える。ついで美濃守が据り直す。美濃守の対座の位置に聖謨の刀をかけた刀掛が差出されるので、そこに据り、少々進みながらいささか下って「弥御勇健」と言うと、美濃守が「御安泰」と答える。

終って「大家国持と。初而對話之事故。菓子も給。酒も十分に三献給申」した。これで直ちに退去したかったが、美濃守が領分に金銅山試掘があり出張したとして、佐渡勤務であった事から嘯がでる。金山には山師が多いのに領主が乗込むようでは覚束ないと腹の内では思っている。帰ろうとするが駄目で、異国の事など人私で申して「漸之事ニ而暇乞」になったが、鷹を召連れていると「直達演」を見学させられ雁を貰ってやっと次の間迄送られて、旅宿に帰っている。立つけに着替えて「如飛に急候而。旅宿へ着」して叔父に会っている。

大変長くなったが、恐らくこれは勘定奉行と藩主の会合で、長崎奉行と名代ではもう少し簡単ではあるまいか。

さて弘化三年八月頃の長崎奉行平賀三五郎信濃守勝定の下向に際しての御出会御用は日雇支配忠五郎が引請けたが、具体的な事は明らかでない。

つぎに同年九月二九日に長崎帰府の長崎奉行井戸大内蔵対馬守覚弘に山家での御出会御用を日雇支配四人が請負っている。

弘化三年一〇月付、原武助、前田八助宛日雇支配四人「山家御出会被召仕候日雇賃錢并看板損料錢とも請取申上事」によると、御用は日雇賃錢、看板損料共に丁錢六二貫九七二文であり、兩替六貫八〇〇文で(A)金九兩一步、錢七二文

になる。人数一三八人二歩、看板一二一枚である。内訳は第三六表の通りであるが、御供日雇一二〇人四歩に対する現人言付前は四九人斗りとなっている。

九月二八日夜九ツ時に出発し、二九日九ツ時に到着した。往来は夜中が雨天のため、一人役では難渋として三人役を願上げたが、評議の結果二人八歩役を御滞座日雇について渡される事になった。

つぎに同年一〇月付日雇支配四人の「御小姓様御附人ニ被召仕候日雇賃錢請取申上事」として、平日雇四人の賃丁錢二貫三十一文一步、即ち一人丁錢二〇〇文宛で九月晦日夜四ツ時から一〇月朔日夜九ツ時迄の賃錢である。そして看板四枚損料丁錢四〇〇文、従って一枚丁錢一〇〇文に当る。この両者合せて丁錢二貫七十一文、即ち(B)金一步二朱、丁錢一六一文になる。

それに矢張り御小性宛日雇支配四人「小性鎗持相対雇証ニ前之事」として、御道具持六人、一人四五〇文宛二人役で(C)丁錢五貫四〇〇文がある。

AとCを金一朱二丁錢四二五文で合計すると、証拠として金一〇兩一步二朱、丁錢五三三文が日雇支配の手に入っている。

なお前記の現人言付前四九人斗りの内訳は「御鎗方言付之覚」によると、御供日雇四八人、日雇支配一人、小指之者五人、合計五四人で日雇は各種挾箱、薬箱、提灯、合羽、弁当などに当る。この言付の外に矢張り惣日雇の昼食、雨具持、竹馬五荷のため人足一〇人を合羽籠日雇として要している。

実際の業務は下方、即ち小差の半右衛門、利三郎、久次の三人が下請しており、第三七表に示した賃錢二二貫一

項 目	人・枚数	賃 錢	1人当	
			丁錢	文宛
御供日雇	12.4人	丁錢 文 44,066.6	366	
御供日雇	1.0	366.0	366	
小指之者	14.0	5,600.0	400	
支配料	2.8	840.0	300	
看板	121枚	12,100.0	100	
合 計	—	62,972.0	—	

第36表 弘化3年長崎奉行
山家出會賃錢等表

○文、即ち(D)金三兩一步、銭一〇文が渡されている。その他に雑用として、弁当、蒲団、蠟燭代等の(E)金一兩計り、

御小当、病人代り等五人の賃銭(F)銭三貫文、御陸士目付御付人料一人分の賃銭(G)銭八五〇文がある。

D、Gの合計金四兩三步、銭四五〇文が下方に渡された金額である。そこで金五兩二步二朱、銭八三文が残る。従って残額は日雇支配に渡された額の六三・五%に達する。御先触人数と実動人数との関係、看板損料など不明な点が多いので確言出来ないが、日雇支配の利益は相当大きいものだろう。

なお御発駕前に山家で御鎗方に下宿二軒を差出し、御立ち近くで御鎗方から金五兩を前借しているから、この御出会は御鎗方の職掌である。

日雇支配の内で戌亥屋甚蔵、万屋儀七の兩人が従事した。長崎奉行は田代駅から太宰府に参詣して山家に出たのであるが、その間御国使番木山様は二、三度、長崎聞役毛屋様は一、二度お出になって漸々の事で御出会となり「御料理遺物たいそふ也」とある。

人数	賃銭	銭文	1人当宛
人足 23人	17,940		780
山家御使者附人 4		750	150
宰府御手水掛 1			
小 差 3	2,700		900
御 提 灯 2	720		360
合 計 33	22,110		—

第 37 表 弘化 3 年山家御出会下請表

つぎに前述の嘉永六年十一月二十九日に大目附簡井政憲、勘定奉行川路聖謨、御普請方役其外役々が長崎に魯西亜使節プーチャチンと協議のため下向に際し福岡藩主は滞座先から直接木屋瀬に出会のため赴き、そのため急に福岡から進物を送る事になり、その日雇を仰付けられている。

即ち嘉永六年十二月四日付前田嘉六郎、高田何右衛門宛、日雇支配和多蔵、同喜平次「此節御下向之御役々様江木屋瀬飯塚両所ニ而御進物御品送り持人賃銭請取申上事」には、十一月二十九日から二月三日迄で、小指四人は一日一

人につき丁錢四〇〇文宛で賃丁錢六貫四〇〇文、平日雇二三人は丁錢三六六文宛で賃丁錢三三貫六七二文、合計丁錢四〇貫〇七二文で銀預四〇〇目七分とある。

これは仰付では飯塚行は飯台四釣り一六人に下方三人宛、長持一棹五人に下方四人宛、小指之者一人である。夜通しのため夜増四人役を願ったが一人役増で都合四人役とあるが、三人役が何であるかは不明である。

木屋瀬行は小指之者三人に下方二人で、荷物送り才料荷持人は人足であり、持人二人に下方一人となっている。

これに対して善次「下方算用」は飯塚行については飯台四釣り一二二人、長持一棹四人で合計一六人の三日分は一人九五〇文宛で一五貫二〇〇文、つぎに小指之者（善次）一人で三日分は一日四〇〇文宛で一貫二〇〇文、合計一六貫四〇〇文とある。

木屋瀬行は小指二人、持人一人のみで金額を欠いているが、日数は三日であるから持人を人足と考えて飯塚行の例で計算すると、三貫三五〇文になり、木屋瀬、飯塚の合計は一九貫七五〇文になる。若しこれが小差に渡した金額で丁錢だとすれば、日雇支配は役所から渡された額の半分近くが手元に残る事になる。

便宜上ここに記するが「原静馬様佐賀役人出会日雇事」がある。これは肥前佐賀藩役人が恐らく福岡にきて、福岡藩長崎聞役原静馬が出会った際のものである。嘉永二年六月と同年九月に出会っている。

六月には三日分の日雇賃錢六錢一八九匁、即ち金一兩二步二朱、錢二九〇文である。これは上日雇は七人で一六八匁、内訳は一日一人錢八匁宛で、陸尺四人、御道具一人、御長柄一人、御挾箱一人となっている。平日雇は一人で一匁、内訳は合羽籠に当り一日一人七匁宛である。

実際の支出は上日雇七人を二日分金二朱宛で金三步二朱、残りの一日は七人共に平日雇扱の一日七匁宛で二貫九四〇文、合計八貫八九〇文である。前述の平日雇一人は手元にいる友吉でまに合せたので賃錢は不用、従って一貫一九

○文が手元に残るとあるが、これは一朱¹¹四二五文の計算では二貫四五〇文の残りの筈である。仕事に当たった次三郎に酒分として六〇〇文を渡している。

つぎに九月には一日分で上日雇七人で一人六錢八匁宛で五六匁、平日雇一人で七匁宛で七匁、合計六錢六三匁、即ち金二朱と三八〇文を受取っているが実際の使用は上日雇七人を七匁宛で四九匁、平日雇は手元の梅吉を当てたので賃錢不用、次三郎に世話料酒代三匁五分であるから、約一七%が利益である。手元の下男か何れかの流用がなければ市内での日雇は殆んど利益はないだろう。

一二 福岡藩医師長崎差越

「長崎江植痘病伝授医師被差越候節駕籠損料之事」によると、嘉永二年一月に長崎に植痘病伝授のため、福岡藩医師江藤恬山、安田仲元が小兒五人を召連れるため引戸案駄五挺入用の内で、四挺は御構役所から出るが、残る一挺を日雇支配が請負っている。

「福岡藩家中分限帳」によると、安田仲元は針療で十五石三人扶持○安田仲元⁽⁸⁾とみえているが、江藤恬山は見当らない。小兒医師、八石三人扶持、本道の江藤元⁽⁹⁾がこれであろうか。後考にまきたい。

嘉永二年一〇月付原武助、前田八助宛、万屋喜平次「今般抱瘡為御療治方長崎表江被差越候御醫師御貸渡安駄損料代錢受取申上事」では一月八―三日の一六日間を一日三五〇文宛で丁錢五貫六〇〇文、即ち金三步、丁錢五〇〇文で請負っている。

実際は呉服町駕籠屋に一日三〇〇文宛で、道中往来のみ、長崎居滞留中は賃錢を渡さない事で下請に出している。計算通りなら一六%の利益である。

つぎに「長崎奉行様病氣ニ付青木松次様長崎御指越被召仕候日雇之事」によると、嘉永三年四月四日に長崎奉行大江遠江守明啓が病氣のため医師青木春沢が五日に赴くので、御鎗方から万屋喜平次に駕籠日雇四人、薬箱老荷一人の手当が仰付けられた。

万屋は青木春沢と打合せたが長崎逗留の期間は不明で、彼が薬受持となれば長期化する可能性もある。そこで見込日雇賃金は嘉永元年に長崎奉行が病氣で江藤恬山が赴いた際に請負った戌亥屋に聞かせて、下方賃金として往来は一日一人五七〇文宛、長崎居滞留は同四二〇文宛で奉行所上勤に当る。往来日数一〇日、長崎居滞留五日と見積って左平に渡し、外に居滞留延長の場合を考えて青木に用心金三両を預けている。

ついで同年四月八日付御鎗方御役所宛、日雇支配喜平治「覚」では、御駕籠日雇四人と御薬箱持二人、後者の内一人は肩入才料兼とし、一日一人銀六匁五分二厘宛と願っている。

薬箱持は一人にされている。理由は江藤恬山の際と条件が異なるので前回同様一人でよいとされている。奉行は「柳営補任卷之二十」⁽¹⁰⁾によると同年五月二五日に長崎で死去したので、青木は同月二九日に帰着している。

さて嘉永三年五月二九日付、原武助、前田八助宛、日雇支配喜平治「青木春沢様長崎表江御指越被遊候ニ付被召仕候日雇銀受取申上事」には、四月五日から五月二九日迄五四日で駕籠日雇四人は一日一人銀六匁五分二厘宛で賃銀一貫四〇八匁三分二厘、御薬箱持一人は矢張り六匁五分二厘宛で賃銀三五二匁八厘、合計銀一貫七六〇匁四厘となる。この内三回の前借があり清算の際に受取っているのは銀三九五匁四分、即ち金六両、丁錢五四〇文、半銀五匁四分である。

これらの計算からすれば、半銀一〇匁Ⅱ丁錢一〇六文、金一両Ⅱ丁錢六貫八〇〇文の関係があるから、受取半銀一貫七六〇匁四厘は大略丁錢一八六貫六〇二文位に当る。

これに対して「下方左平算用」は、駕籠日雇四人は武八、武平、喜助、次介で、薬箱持一人は唐人町左平が才料で兼ねる。賃金は日当は前述の通りで往来一〇日分が賃金二八貫五〇〇文、長崎居滞留四日分が賃銀九二貫四〇〇文、合計一二〇貫九〇〇が建前である。

実際には金一七兩三步二朱が使用され、他に左平、武八留守宅貸金一兩、左平心得金一步、両替遣関係丁錢三貫六〇〇文、合計丁錢一二六貫二〇〇文が使用されている。

この左平関係以外に青木宅留守見舞、到着祝儀、其他酒肴代として金三步二朱、丁錢一貫一〇〇文、合計丁錢四貫二五〇文の出費がある。

結局丁錢一三〇貫四五〇文が経費総額であるから、三九%の利益を万屋は得た訳である。

一三 葬式日雇

安政二年乙卯四月二日「若殿様御誕生翌日御逝去御葬式御用日雇之事」によると、同年四月二日に産れ、翌二日に逝去した若殿で御法号は幻堂義泡大童子である。

葬式日雇仕方は同年四月御鎗方に提出した証拠控では賃丁錢一貫〇八五文六歩で銀預一一〇匁八分となっており、内訳は第三八表の通りである。御棺舁には才判として上下着用し日雇支配四人が御棺脇に附添うから、これは日雇支配四人の請負である。看板と合羽は御鎗舁計りの使用である。

つぎに同月御構日雇賃金、損料は御構に提出した証拠控では賃丁錢六貫一五二文で、銀預六一匁五分である。内訳は第三九表の通りである。

請負金額は両者の合計丁錢一七貫二三七文六分になるがこれを一七貫二四〇文と計算している。

これに対して下方渡しは、御棺昇は合羽籠一人共で一二二人、一人一日三三〇文宛で賃銭三貫九六〇文が御館方から言附けられたものである。つぎに駕籠日雇は御構合羽籠一人共で一六人、一人一日二七〇文宛で賃銭は四貫三二〇

文、これは御構日雇だろう。合計八貫二八〇文が下方に渡した金額である。この他に酒代五二〇文を渡しているので使用総額は八貫八〇〇文になる。これを日雇支配が一人二貫二〇〇文宛出合ってすませた。

そこで利益は差引八貫四四〇文になり、支配一人当り二貫一一〇文宛を配当している。五一%の利益である。

つぎに嘉永四亥年五月一七日付「乾竜院様御塔手伝夫御作事々被仰付候事」では、一〇代黒田斉清の御塔御用手伝夫を仰付けられている。御作事方から第四〇表の根積りで御用を仰付けられている。即ち御郡夫一万五三七〇人分を日雇六五三〇人で請負う。七五三〇人請負の所用心に引除いてこの日雇人数になり賃銀は銀一四貫一〇四匁八分となっている。

仕事は墓所構築だろう。日雇の御郡夫に対する比率は四二%であるが、これが旅行の場合にも同率かは今後にまちたい。

項 目	数	1人・損 料 銭	賃 役	賃銭・損料 丁 銭 文
御 棺	10.6人	340	人 役 1.5	8,160.0
昇 雇	3.6	146	1.8	525.6
日 雇	16枚	100	—	1,600.0
看 板	16	50	—	800.0
合 計	19.6人	—	—	11,085.6

第38表 安政2年葬式・御館方分賃銭・損料表

項 目	数	人・枚当 銭 文	賃 役	賃・損料 丁 銭 文
駕 籠	15人	174	人 2	5,200
合 羽	1	146	2	292
合 羽 損 料	16枚	40	—	640
合 計	16人	—	—	6,152

第39表 安政2年葬式御構方賃銭・損料表

同年六月四日崇福寺における乾竜院様百カ日法事には万屋は麻上下を着用して拝礼している。これは格式扶持の一

	御郡夫人	日雇人
山所木屋掛	570	230
山所切立手伝	13,000	5,500
御塔舟積波戸	450	180
崇切寺清波戸	950	450
山所木屋番	150	75
御石棺	180	25
四ヶ所石屋木屋	70	25
合 計	15,370	6,530

第40表 嘉永4年乾院御塔
御用手伝根積表

員としてである。

ここに便宜上記すると、前記安政二年葬式日雇賃金が銀預りであるのに関連するが、嘉永三年一月五日「諸証に銀預切手渡りニ付正銭願之事」には、本町銀会所銀切手渡が仰付けられて難渋するとある。即ち同日付御普請御役所宛日雇支配喜平次、忠五郎、和多蔵、七次郎「奉願上口上之覚」には、御役所御用日雇賃金は今回御銀預に渡される旨の違があつたが、日雇賃金は毎日一人宛渡すから御預銀では配当に困るから、御銀預は一匁以下の所で、又証拠高の内三分の一は正銭で渡された。以前天保年間に御切手渡になつた時も三分の一は正銭渡しであつたと願出ている。結果は明らかでない。

なお現在は御作事計りで他役所に従事してないから御普請役所のみ願出ると但書がある。

一四 火事日雇

嘉永四年と推測される亥年八月に火事日官として南奉行に証拠を提出している。即ち頭取四人は四〇〇文宛、平日雇五〇人は二七文宛で丁銭九〇貫六〇〇文の金額である。支出は丁銭七五貫五五〇文で内訳は鈴木様、浜様、御銀方六軒、小使三人、下小使四人、世話料、肴代である。差引丁銀一五貫〇五〇文の残りを四つ割にして一人三貫七六二文になる。前記の肴代は四つ割役成の際に浜様に渡している。日雇支配四人が請負つたのだらう。一七%の利益だが南奉行の火消を請負つたのか、どうか具体的な事は不明である。

一五 明治初年

維新には万屋は福岡藩の関東出陣のための御勤夫代日雇の賃金仕送り伏見などの荷物御用、一般の御用日雇を勤めて上方にいたらしい。御上京御用向の同役との交替を命ぜられたのに対して、同役同様を願出ている事実がある。

福岡藩では維新前後に足輕諸隊が編成されたが、明治二年編成の勇力隊の会計を他の者と共に命ぜられ、翌三年三月には勇力隊役所から短刀一腰を渡され、後年のため「宝物添書」をしている。

同三年五月には粉屋喜三次に金一二〇両を商売用に貸している事実がある。金融面での動向は明らかでない。

明治四年三月付会計御懸宛、森田喜平次、吉田忠五郎、野上和多三、上野又四郎、森田又次「覚」では、御改革の折柄であるが、今後も従来通り請持の者に仰付を願っている。それは

一 御参朝之節御召仕日雇

一下関、中国、四国、其外東路御召仕日雇御用

右口々請持 森田又次、上野又四郎、森田喜平次

一 長崎御見廻日雇御用

一 九州路御召仕日雇御用

右口々請持 日雇支配 上野又四郎、野上和多三、吉田忠五郎、森田喜平次

とある。^(補)九州内は日雇支配全員、九州外は大坂通日雇の免札に關係する日雇支配に区分される。この事は大坂通日雇は西国一体の日雇支配との協力体制に基盤がある事を示している。そして福岡日雇支配の營業が参勤交代、長崎警衛と極めて密着している事も示している。これら幕藩体制的な機關の崩壊は強い影響を与えるだろう。

明治四年四月九日に貨幣偽造を審問された黒田長知は七月二日に福岡藩知事を免ぜられ閉門となり、同月一八日に長知は城内下屋敷を引払い、八月二三日上京している。⁽¹⁰³⁾

この間の事情を反映して未年四月付安部正三郎宛森田喜平次、上野又四郎、森田又次「乍恐奉願上口上之覚」には、秋手成様五月御東行は御供を少数にする筈だが、必要人数の抱入には人選のため三人に請負せ、一人は東京での藩内から入込んだ者を雇う際に人品を吟味するために召連を願っている。そこで「私共是迄□御渡方と申儀は少茂無

御座候得共、拘ル瘦弊之困窮之折柄ニ付、乍恐生活之道相立候程、御渡被仰付被為下候様、奉願上候」と、生活の困難を訴えている。

次で藩知事を免ぜられた後に、未年八月付御家職方宛、森田喜平次、上野又四郎、森田又次「乍恐奉願上口上之覚」は、御方々様の御東行は微行だが御用使を命ぜられ、船の端にでも乗組み、御着の報知を仰越される御封箱を請取る迄御賄を願ひ、帰路は私用もするので自前で行を願っている。末尾は「此段不絶悲歎余り不奉願恐奉願上候以上」と結んでいる。⁽¹⁰⁴⁾

しかし明治四年九月は營繕方は諸職人、日雇の賃銀を第四一表の通りとしている。仕業四時は五ツ時に仕業取懸、四ツ時に煙草休、九ツ時に三步休、八ツ時に二歩休、七ツ時に揚りである。平日雇が自然出方の際は賃銀預一八匁四分であり、刻限遅速により増減される。表の他に在々の田畑作料は四時八歩仕業で賄料を引いて賃銀預二二匁一分となっている。

そして明治六年下堅町戸籍帳⁽¹⁰⁵⁾では七〇戸の内日雇が六戸あり、同居五、借宅一で、出身は柳川二、筑前三、肥後一とあるから、日雇は存在を続けている。日雇支配に当る機構がどうなっているかは明らかでない。

	1時 銀	勿	仕 銀	4時 業預
人掘	6.00			24.00
職戸	6.12			24.50
井工・同雇	4.60			20.40
細日雇	4.60			—
平				

第41表 明治4年諸職人・日雇賃銀表

明治四年一二月には枝道郵便が開られ、福岡郵便取扱所、簗子町駅通所、但切手売捌共として取扱人港町本町野上和多三、切手売捌所上野又四郎とある。⁽¹⁰⁶⁾

万屋森田家も生活は続いているのだから、何時迄も悲歎にたえていた訳ではないだろうが、その後の職業は明らかでない。

一六 結びにかえて

以上により福岡日雇支配と大坂通日雇の關係、福岡藩と日雇支配の關係をみた。

江戸、伏見、京都、大坂の通日雇は、全国の城下町にあるこれら類似の日雇と矢張り關係があったと考えられる。

つぎに福岡藩では日雇支配は郡夫請と自己の營業をみており、乾竜院御塔手伝夫のように郡夫を日雇でおきかえている場合がある。

福岡藩の郡夫を含めての夫役については、秀村選三「福岡藩における夫役の賦課法と規制」⁽¹⁰⁷⁾によると、夫役の賦課、収取は幕末まで藩の収取体系の一つの構成要素である。大名Ⅱ藩—領民の夫役収取關係で最重要なものは土木普請、宿駅交通、運搬夫役で「石高制Ⅱ米年貢制の確立は大名領国の収取体系（Ⅱ領主制）の最大の特徴であるが、それが形成・維持されてゆくためには、かかる夫役を前提としなければならなかった」とし、宿駅交通も交通夫役が基礎にあり、夫役が大名領国制、幕藩体制存立の一構成要素であった。この夫役は一部代納化され、代納化された貨幣で現夫（生の労働収取）の一部に輕微ながらも賃金を支払う事も出来た。それは貨幣經濟の發展、商品流通の展開により、又農民が隸屬身分からある程度遊離していたからだ、これは夫役の消滅を意味しないとみている。

そしてこの夫役は領主の家權力へでなく、領国体制が存立するための労働力と評価すべきであるとしている。筑前

六宿筋人馬仕組制にみられるように夫役の代納の外に、現夫に対する賃錢支払化は、日本における雇用関係の源流として下人、奉公人関係の他に、藩の夫役に対する賃錢支払化も考えるべきで、幕末・明治期の藩営・官營事業の労働者にもつながるものと評価している。

以上私なりに秀村氏の説を理解してみたが、ここに夫役の賃錢支払化には、近世Ⅱ幕藩体制に適合した形態での夫役の性格を強固に持ちつつ、一方幕末・明治期の藩・官營事業の労働者につながるものとしての性格も持っている。この両者が如何なる関係かは私はまだ考えていないし、また秀村氏の説の理解に誤まりがある事をおそれる。又全面的に夫役の理解を秀村説に求める事は好ましい事ではないが、現在の所遺憾ながら私はこれを越えるものを持っていない。

万屋はこの夫役の賃錢支払化の延長線上に、經濟の展開からする労働力としての日雇の成立を背景に位置していると言えよう。

さて福岡藩の場合に日雇支配万屋の營業は宿駅制度、藩機構、及び日雇の成立する条件としての近世中期以後の労働力のあり方が問題である。

通日雇として交通関係を考えても、これは諸侯、家中の場合には御定賃錢とそれ以外の増賃錢等による相対雇の一部と考えられる。

万屋ではないが文化八年朝鮮人応接使往来道中を福岡資子町万屋藤三郎が領内分を請負った際には人足については御朱印証文分も含めた請負である事実がある。⁽¹⁰⁹⁾

これらを含めて福岡藩の場合には郡夫請で交通夫役が賄なわれている。とすれば万屋の日雇はこの郡夫との関係が問題になる。

熊本藩の場合に天保期「(肥後藩細川家)御勝手方心覚帳」⁽¹⁰⁾では、継人馬の朝夕継立が取締のため通人馬出方がましている旨の指摘があるので、他藩でも同様の事が予想される。しかも藤沢晋「近世交通史の一考察―参勤交代諸侯の人馬使用形態と継送り側の負担―」⁽¹¹⁾によると、幕府直轄街道以外では諸侯、家中の二五人、二五疋、それ以上は相對賃錢の基本的規制のみ適用されたが、山陽道の場合には備後、安芸では幕末の元治に初適用、周防、長門は終に適用されなかったとあるだけに、余計問題である。

これら交通夫役の他に、万屋は藩の鎗方、町方、作事方、構方などと密接な関係があり、ある意味では福岡藩黒田家と運命を共にした御用商人ではあるが、一方万屋の営業を可能にし一方それを崩す面も持っていた日雇層は明治期にもずっと存在し、これの統制機関は矢張り必要であった筈であるが、日雇一般の問題に展開出来なかった事を遺憾とする。

基本的には大坂通日雇と福岡日雇支配は似た性格のものと理解したい。なお嘉永二年五月に万屋喜平次は郡役所から郡修履銀小払請持を仰付けられ、小払御銀御預の引当として持家を引当ているが、これが郡夫請と関係があるかは確認していない。

註

(1) 鞍手郡教育会編「鞍手郡誌」六八二頁、直方市史編さん委員会編集「直方市史」上巻七一―一二頁、伊東尾四郎「福岡藩旧事叢話(七)」筑紫史談二〇集四七頁

(2) 「福岡県史資料」四輯三七四―五頁

(3) 秀村選三「福岡藩における夫役の賦課法と規制」(宮本又次編「藩社会の研究」一九六―九頁)。なお「鞍手郡

誌」七〇八―一三頁の郡夫可相立定も同年のものである。明治七年寅十二月は明和七年の誤植である。

(4) 福岡藩が宿場での処遇について定めた安永一〇年改訂「諸通執行の定」(「直方市史」上巻七一五―二九頁)には、1 長崎奉行、2 鹿兒島、熊本、佐賀、柳河、人吉、大村の諸藩、3 久留米、島原、唐津、小城、蓮池、鹿島、

幸戸、三池、宇土の諸藩、4日田郡代、5御料代官、6御陸目附、支配勘定、普請役、7日田本締、支配勘定格、8長崎町年寄、9阿蘭陀人、附添役人、10御料漂着異国人、11御状箱、御用物、12唐銀、公用銀、13御用鳥獸がみえている。

(5) 「鞍手郡誌」七〇四―五頁

(6) 「同右」七一三―三五頁

(7) 福岡大学商学論叢一七卷一號、なお藤本氏は匁錢の分布を四国を含む西南地帯と考えている。

(8) 「鞍手郡誌」七三五―九頁。「直方市史」上巻七四二頁(竜徳村庄屋手控による)により修正した。なお諸藩の石高、国、藩主は文化四年千鐘房須原屋茂兵衛蔵板「新板改正文化武鑑」による。

「新板改正文化武鑑」による。

(9) 秀村選三、他校註「博多津要録」一巻五二頁

(10) 「同右」一七三―四頁

(11) 「同右」二七五―六頁

(12) 「同右」三二三―四、三二六頁

(13) 文久四甲子歲卯月下旬写、国立史料館蔵本、

(14) 藤本隆士「近世博多における初期特権商人の後退と連上銀体系の成立」福岡大学商学論叢三卷一號二―三頁参照。即ち不勝手のため御用日雇本メを願ひ、日雇銀から肩銀五百目を年々受取るが「尤肩銀とハ存間敷候、公儀々拜領と可存候」とある。

福岡日雇支配・大坂通日雇萬屋喜平次について(藤村)

(15) 「博多津要録」一巻三四九―五〇頁

(16) 「同右」一巻三七七―八頁

(17) 「福岡県史資料」六輯二〇七頁

(18) 「同右」五輯二八五―七頁。なお郡役所記録(同上)四輯三一八―九頁、町役所記録(同上)六輯二〇八頁にも出ている。

(19) 「福岡県史資料」六輯二〇九頁

(20) 「博多津要録」一巻五五三―六頁

(21) 「福岡県史資料」四輯三三三頁

(22) 九州大学九州文化史研究所蔵本、表題は「福岡県史資料」三輯による。以下九州文化史研究所本による場合は註記しない。

(23) 「福岡藩町役所記録」(「福岡県史資料」六輯二一八頁)には元文五年七月朔日付「旅奉公人日雇問屋初候事」とある。いずれにせよ七月である。

(24) 玉泉大梁編「福岡県史」二巻四八三―四頁

(25) 「福岡県史資料」四輯三五七頁

(26) 九州大学経済学研究一六巻一號一―三、一一六頁

(27) 宮本又次編「九州経済史研究」所収

(28) 「福岡藩町役所記録」(「福岡県史資料」六輯二三〇頁)には寛保元年三月一六日付「札無しに日雇停止、賃銭定之事」とある。内容は確認していない。

(29) 「福岡藩町役記録」(「同右」六輯二三〇頁)五月一

一日付「日用賃銀改之事」とある。

- (30) 「福岡藩町役所記録」(「同右」六輯二三二頁)は七月二〇日付「日用銭又々改候事」とある。

- (31) 「福岡県史資料」六輯二三二頁

- (32) 「同右」六輯二三二頁

- (33) 「同右」六輯一八五頁

- (34) 「島井文書」(「福岡県史資料」六輯一六九頁)には同文の証文が収録されている。日付は「亥ノ正月」でなく「寛保三年亥二月」であり、署名人二人の順序は逆になっている。

- (35) 「福岡県史資料」六輯二三九―四〇頁、「博多津要録」(「同上」三輯二九三頁)には三月一〇日付「両市中日雇賃銀相究申事」とある。

- (36) 「同右」三輯二八八頁、「福岡県史」二巻四八四頁

- (37) 「福岡県史資料」三輯二八八頁

- (38) 「同右」三輯三〇七頁

- (39) 「同右」三輯三一七頁

- (40) 36、39は九州文化史研究所本によった。

- (41) 「福岡県史資料」三輯三四五頁

- (42) 「同右」三輯三五三頁

- (43) 41、42、44は九州文化史研究所本によった。

- (44) 「福岡県史資料」三輯三一五頁

- (45) 「同右」六輯二五二―五頁

- (46) 「同右」二輯四九二頁

- (47) 「同右」三輯により博多津要録にみえる以後の関係触は、延享元年一〇月二八日付「博多次所、此以後御詮儀所ニ相成り申事」(二八二頁)、同二年一月付「津中人足銭四文相増申事」、同一年一月七日付「同定切銭上納除分御役所へ指出ス」(二八七頁)、延享三年二月一〇日付「両市中人足次キ方定之事」(二九三頁)、寛延四年六月一二日付「次所人足定詰夫ノ内耆人減少被仰付事」(三〇九頁)宝暦四年五月二五日付「次所表向之練翫修復被仰付候事」(三二五頁)、同九年一〇月一八日付「人足支配久右衛門役儀理願指出候所、御留メ被成爲御褒美青銅被下候事」(三五五頁)である。

- (48) 本庄栄治郎、他共編「近世社会経済叢書」九巻一九四頁

- (49) 「福岡県史」二巻七九―一二頁

- (50) 「新訂寛政重修諸家譜」第七 二〇九―一四頁

- (51) 嘉永三戌八月の大工作料は、一日一人米二升四合三勺(代二四七文)銀一匁三分九厘(代一四二文)即ち一時につき米六合四勺、銀三分六厘に当り、一日大工作料は三八九文である。

- (52) 檜垣元吉「福岡藩政史の研究―天保の改革」史淵四〇、五二輯

- (53) 宮本又次編「九州経済史論集」三巻二六五頁

(54) 「福岡県史資料」九輯四五―一頁

(55) 近藤典二「福岡の日雇人足請負人」福岡地方史談話会会報一〇号三九頁によると、上野又七は炭屋又七であり、天保一五年五月万屋喜平次、万屋又次の願書では炭屋又七が幼少の際に後見人又兵衛が御咎をうけ地旅共御用向を放たれ万屋喜平次、同又平が御用をうけ東海道通日雇御用を勤め、以前御用を勤めた近江屋仁右衛門の拝借金残額を引受けた。

文政六年炭屋又七は見習となり、翌七年から三人交代で参勤往来御用を勤めたとあり、天保一五年には炭屋のみになり両万屋は復帰を願っている由である。

(56) 「福岡県史資料」九輯二九七頁

(57) 「同右」九輯三二〇―一頁

(58) 「福岡県史」二卷一七八―九、二七五―六頁

(59) 近藤典二「前掲稿」会報一〇号四〇頁には二代喜平次の文政六年から安政四年までの「御参勤御往来御用記」の奥書に初代喜平次は享年七九歳で天保八年卒とある由である。

昭和五〇年二月近藤氏の御教示によると「御参勤御往入御用記」は森田家旧蔵文書であり、氏は昭和四二年六月西日本史学会で「参勤往来の通日雇請負について」として発表された由であるが、私は未見であり、発表要旨を入手していない。

福岡日雇支配・大坂通日雇萬屋喜平次について（藤村）

(60) 「福岡県史」二卷四三七―八、四四〇―一頁

(61) 「福岡県史資料」九輯四五―二頁

(62) 「福岡県史」四卷三三六―八頁参照

(63) 明治三年福岡藩職制（「福岡県史」四卷三七―四四頁）では、司民局は市政、郡政、土田、戸口、租税、物産殖、僧尼等を掌り、局内に市井事を掌さどる司市曹と、貧民の撫恤を掌する救育曹がある。司計局は金穀出納、俸禄、土木等の総判を掌する局である。

(64) 福岡大学「創立二十五周年記念論文集（商学篇）」二五一頁

(65) 児玉幸多校訂「近世交通史料集」一卷七二四―五頁

(66) 史料館研究紀要七号一〇二頁

(67) 同右七号一〇三頁

(68) 同右七号一〇二頁

(69) 宮本又次編「大阪の研究―近世大阪の経済史的研究」二卷一一―四四頁

(70) 「福岡県史資料」九輯四四三頁

(71) 「近世交通史料集」一卷七二〇―一頁

(72) 史料館研究紀要七号六六頁

(73) 「福岡県史資料」九輯四四六頁

(74) 史料館研究紀要七号一〇二頁

(75) 「福岡県史資料」九輯四四七頁

(76) 国立国会図書館参考書誌部「諸問屋名前帳 細目四」

(旧幕府引継書目録6) 一八頁

(77) 「近世交通史料集」二卷五五三、五五五頁

(78) 「同右」一卷三四〇頁

(79) 「同右」一卷四五三—四頁には、文政七年長崎表御用向についての福岡藩の飛脚に関する問合、挨拶が記るされている。

(80) 「同右」一卷三七六—七頁

(81) 「同右」一卷三二四—五頁

(82) 宮本又次「上野勝從の『存寄書』について」大阪大学経済学三卷四号六〇—一頁

(38) 福岡藩ではないが、東海道における通日雇の姿として小説であるが十返舎一九「東海道中膝栗毛」(麻生磯次校注「東海道中膝栗毛」日本古典文学大系62)には、享和四年序三編上に大井川で、弥二「(前略)其かわり身ども駕の陸尺が八人、そこへしるしめさる」といや「ハイお侍衆は、弥二「侍供が十二人、やりもち、はさみ箱、ぞうり取、よいかく、かつばかご、竹馬、つがう上下三拾人あまりじや」(二六四頁)とある。この陸尺、鎗持以下が大名の道中での一般的な通日雇だろう。

つぎに文化三年序五編上に桑名を出て「北八(前略)おめへの荷物とわしがのを、いつしよにして、ひとりがつかいで、半日がはりに旦那と家来のしうちはどふだらう」(二三三頁)とて、弥二「しれた事よ、いいひつゝ

あたりに、竹一本をさいかくし、弥次郎がにもつと、北八がつつみを、りやうほうにくゝりつけて 北八「先づとしやくにおめへ旦那よ。おいらは上下といふもので出かけよふ。ナントよつぽど、気がきいてゐるだろふトあとから荷をひつかたげて」(二三四頁)行く、富田のたて場の茶屋で、「弥次「すべて此かいだうでは上下のものや供のものへは、飯を山もりにして出すといふことだ。それだから誰が目にも、おれは旦那、手めへはお供と見えるから」(二三七頁)とあるのは、武家、町人に雇われて荷をかついで通行する通日雇の姿である。茶屋では主人より量多く飯が出る。上下と供とは区別して考えられている。

(84) 「福岡県史」二卷二〇二頁

(85) 「福岡県史資料」九輯四五二頁

(86) 「同右」九輯四五〇頁

(87) 「福岡県史」二卷一八七—八頁

(88) 黒坂勝美国史大系編修会編「続徳川実紀二篇」新訂増補国史大系四九卷三五一頁

(89) 「同右」四九卷三六七頁

(90) 滝川政次郎校訂「牧民金鑑」上卷二四四頁

(91) 大蔵省編纂「日本財政経済史料」卷四 一三二五頁

(92) 「近世交通史料集」二卷一—六頁。なお「駅肝録」福畑雪湖監修日本交通史料集成二輯三四二頁には文政五

年二月付石原清左衛門同御下知として大略同意の違があり、文政六年九月に賀目改所へ達すとある。

(93) 「近世交通史料集」二巻一七頁

(94) 「同右」一巻三一九—二〇頁。なお「厭肝録」前掲書三七一頁には、この相對照と他の条を含めた文政七年七月一日付道中御奉行所宛品川宿他三カ宿請証文が載せられている。

(95) 「統徳川実紀二篇」新訂増補国史大系四九巻四三一頁

(96) 史料編纂掛編纂「大日本古文書 幕末外国関係文書附録之二」二七—九頁、日本史籍協会本「川路聖謨文書」

第六 一七六—九頁

(97) 「統徳川実紀三篇」新訂増補国史大系五〇巻八七頁

(98) 「福岡県史資料」九輯四一二頁

(99) 「同右」九輯四〇九頁

(100) 「福岡藩家中分限帳」(「同右」九輯)には医師として三〇〇石青木道琢(四〇五頁)四人扶持青木春英(四〇七頁)がある。いずれに当るかは確認していない。

(101) 東京大学史料編纂所編「大日本近世史料 柳宮補任五」一二三頁

(102) 「福岡県史」四巻七三頁

(103) 「同右」五巻二三、三三頁

(104) 「同右」四巻三三九—四一頁

(105) 「同右」四巻三四六—五一頁

福岡日雇支配・大坂通日雇萬屋喜平次について(藤村)

(106) 「同右」四巻二五三—四頁

(107) 宮本又次編「藩社会の研究」所収。なお秀村選三「近世大名領国における夫役の諸形態—福岡藩について—」九州大学九州文化史研究所紀要五号参照

(108) 秀村選三「石高制に関する二つの問題」九州大学経済学研究二九巻二号参照

(109) 朝鮮人応接使対州へ往来道中接待方として文化八年未正月に大目付へ(大蔵省編纂「日本財政経済史料」巻四 一〇二〇頁)

米米春中朝鮮信使来聘に付、小笠原大膳大夫、脇坂中務太輔始対州へ罷越候面々、往来之道筋旅宿等掃除并取締に及、不賄道具等も有合を差出可申候、旅宿差支候所は、寺院之類相用候而も不苦、為馳走新規之茶屋を設け、或は送迎えもの差出候儀等可為無用候、其所に無之商売物脇より遺置為売中間敷候、勿論右之面々通行之節、遠慮なく農業いとなみ可申事

御朱印并証文員数之外、余分之人馬入候においては、所定之賃銭取之、無賃之人馬出すべからず候、賃銭之定無之所は、近辺之定に准じ可取之事、

右之通、東海道、中山道、中国、西国筋領知有之面々へ可被相触候

とあり、これは「文恭院殿御実紀巻四十六」(「統徳川実紀一篇」新訂増補国史大系四八巻六七二頁)に於て馬国

朝鮮信使聘礼事済として、文化八年三月廿九日に朝鮮信使が対馬国府中湊に着岸上陸し国分寺の客館に入り、「かくてこなたより小笠原大膳大夫忠徳。脇坂中務大輔安童はじめ。林大学頭。大目付目付の人々おひ／＼行むかひ。同じき五月十三日中務大輔安童客館に使用して慰勞し。おなじき廿二日宗対馬守義賀が邸にして。上使正副使出会して国王の書翰かつ万物をさぐぐ。(中略)同じき十九日上使以下の諸有司府中の湊を出帆し。同じき廿五日朝鮮人帰帆す」とある対馬での朝鮮信使応接使の道中触である。

この内で脇坂中務大輔は御老中御名代で、同年四月一日には博多で泊っている。脇坂様御道中御用は福岡簀子町万屋藤三郎と江戸からきた小市兵衛の請負である。万屋藤三郎は御道中上下共に御供をしている。彼の性格は不明であり、又大工町万屋喜平次との関係も明らかでない。

文化八末年閏二月付御町御役所、御郡御役所宛福岡簀子町万屋藤三郎「請書物之事」では、脇坂中務大輔対州下向に際しての御通行通御人馬御先触前御朱印御証文并賃人馬共に御領内宿々召仕う分の人足を銀三九貫目で請負い黒崎から深江の間の間の人足を召仕う。荷馬と口付添の人柄は宿次出方御手当がしてあるから、これに万屋方が雇った通荷才判の者が差添つて才判する。

即ち人足については「御朱印御証文并賃人足共ニ御先触前貳百人ニ候得ハ四割増ニして都合千人」とし、これに御荷物書数の者、その他雑用共に見込んであるから四割増銀高を下されれば追増は願わない。

荷馬については「御朱印御証文并賃馬ともニ御先触前ニ割増口付御手当」を仰付けられているので、その他に荷才料の者を万屋が雇って差添え、継所々々で御荷物附き卸し才判をさせる事になっている。

従つてこの場合の通人足とは御朱印証文、賃人足を含めた人足と考えられる。

(110) 幸田成友旧蔵本、慶応義塾図書館所蔵

(111) 福尾教授退官記念事業会編「近世社会経済史編集」所収

(補) 福岡地方史談会会報一〇号四一頁

追記 拙稿「通日雇について」史料館研究紀要七号三六頁で柳川藩を請負った尾張屋亀吉を大坂と推測したが、訂正したい。

即ち天保一四年初冬序勝左衛門太郎惟寅「夢酔独言」(勝小吉著、勝部真長編「夢酔独言他」平凡社東洋文庫七七・七八頁)には尾張屋亀吉について、

親類の牧野長門守が、山田奉行に転役したが、其月、水心子秀世がいゝ入つて、虎の門外桜田町の尾張屋亀吉といふ安芸の小差が、牧野の小差になりたがつて、おれに頼

んだ故、世話をしてやるふといったつら、金を五拾兩持
てきて、「是で牧野様が御好の者を買って上て呉ろ」
といふから、いろ／＼牧野の息子へ品物をやつたが、
一日おそくつて外の物がなつたから、尾張屋は鼻があ
いた故、「氣の毒だから残りの金をば返す」といつた
ら、「夫は水金でござり舛から御遣ひ被成ませ」とて
三十兩ばかり呉た故、其後に久世がなつた故、世話を
してやるふとおもつて、呼にやつたら、亀吉は疾に死
んだといふから、夫きりにしたけ

とある。「柳營補任」五（大日本近世史料）一三七頁に牧
野長門守は山田奉行に文政一一年正月になつてゐるが、
久世は見当らないから別の役職だろう。

尾張屋は江戸の仲間外で通日雇営業に従事している者
である。

この外に秋月藩の長持の親方の話があるが（三三―四
頁）これが通日雇かは確認していない。

本稿の作製に当り国立史料館、九州大学九州文化史研
究所、慶応義塾図書館、三井文庫は所蔵史料、圖書の利
用を許可された。秀村遼三、藤野保、藤本隆士、丸山
雍成、近藤典二、黒田安雄、田中康雄、嶋田早苗、楠本
美智子、菟田克子、長崎沢子の諸氏のお世話になった。
記して感謝したい。

福岡日雇支配・大坂通日雇萬屋喜平次について（藤村）